

歌集

別離



若山牧水著



# 離 別

水 牧 山 若

版 藏 堂 雲 東

明治四十三年四月五日印刷  
明治四十三年四月十日發行

正價金七拾五錢

著作者 若山繁

京橋區南傳馬町三丁目十番地

發行者 西村寅次郎

神田區松下町七、八番地

印刷者 橫田五十吉

不許  
複製

發行所

東京市京橋區南傳  
馬町三丁目十番地

東雲堂書店

電話本局一六三九、振替東京五六一四

（別離集附）

刷印所版活田嶺

名著複製全集 近代文学館 昭和43年9月1日・日本近代文学館

## 自序

廿歳頃より詠んだ歌の中から一千首を抜き、一巻に輯めて『別離』と名づけ、今度出版するこゝに於て、昨日までの自己に潔く別れ去らうとするこゝろに外ならぬ。

先に著した『獨り歌へる』の序文に私は、私の歌の一首一首は私の命のあゆみの一歩一歩であるとして書いておいた。また、一歩あゆんでからは小さな墓を一つ築いて來てゐる様なものであるとも書いておいた。それらの歌が背後につづいて居ることは現在の私にとつて、可憐しくもまた少なからぬ苦痛

であり負債である、如何かしてそれらと絶縁したいといふ念願からそれを一まとめにして留めておかうとするのである。然うして全然過去から脱却して、自由な、解放せられた身になつて、今まで知らなかつた新たな自己に親しんで行き度いとおもふ。

また、昨年あたりで私の或る一期の生活は殆ど名残なく終りを告げて居る。そして丁度去年は人生の半ばといふ廿五歳であつた。それやこれや、この春この『別離』を出版しておくのは甚だ適當なことであると私は歎んで居る。

本書の装幀一切は石井柏亭氏を煩はした。寫眞は一昨年の初夏に撮つたものである、この一卷に收められた歌の時期の中間に位するものなので挿入しておいた。

歌の掲載の順序は歌の出來た時の順序に従うた。

左様なら、過ぎ行くものよ、これを期として我等はもう永久に逢ふまい。

明治四十三年四月六日

著者

別

離

上

卷





自明治三十七年四月  
至同 四十一年三月

水の音に似て啼く鳥よ山ざくら松にまぢれ  
る深山の晝を

なにとなきさびしさ覺おぼえ山ざくら花ちるか  
げに日を仰あふぎ見る

山越えて空わたりゆく遠とほ鳴なりの風ある日なり  
やまざくら花

朝地震なす空はかすかに嵐かして一山い白もきやま  
ざくらばな

行きつくせば浪青やかにうねりぬ山ざく  
らなど咲きそめし町

朝の室<sup>むろ</sup>夢のちぎれの落ち散れるさまにちり  
入る山ざくらかな

阿蘇の街道<sup>みち</sup>大津の宿<sup>しゆく</sup>に別れつる役者<sup>やくしゃ</sup>の髪  
の山ざくら花

母戀こひしかかるゆふべのふるさとの櫻咲くら  
む山の姿よ

父母ちちははよ神にも似たるこしかたに思ひ出あり  
や山ざくら花

春は來ぬ老いにし父の御みひとみに白しろううつ  
らむ山ざくら花

怨みあまり切らむと云ひしくろ髪に白躑躅  
さすゆく春のひと

忍草雨しづかなりかかる夜はつれなき人を  
よく泣かせつる

山脈や水あさぎなるあけぼのの空をながる  
る木の香かな

日向ひらがの國くにむら立つ山のひと山に住む母戀し  
秋晴あきはれの日や

君が背戸せとや暗やみよりいでてほの白しろみ月のなか  
なる花月はなつき見草みぐさ

蟬こほろぎや寝ものがたりの折り折りに涙もまぢる  
ふるさとの家

秋あさし海ゆく雲の夕照りに背戸の竹の葉  
うす明りする

朝寒や萩に照る日をなつかしみ照らされに  
出し黒かみのひと

別れ来て船にのぼれば旅人のひとりとなり  
ぬはつ秋の海



秋風は木の間に流る一しきり桔梗色してや  
がて暮るる雲

白桔梗君とあゆみし初秋の林の雲の静けさ  
に似て

思ひ出れば秋咲く木木の花に似てこころ香  
りぬ別れ來し日や

秋立ちぬわれを泣かせて泣き死なす石とつ  
れなき人戀しけれ

この家は男ばかりの添そひ寝ねぞとさやさや風の  
樹に鳴る夜なり

木の蔭や悲しさに吹く笛ふえの音ねはさやるもの  
なし野にそらに行く

吾木香われもかよすすきかるかや秋くさのさびしさ  
はみ君におくらむ

秋晴あきはれや空にはたえず遠白とほしろさ雲の生れて風あ  
る日なり

秋の雲梯かきと榛はりとの樹樹きぎの間にうかべるを見  
て人も語らず

幹に倚り頬ほをよすればほのかにも頬ほに脈みやくう  
つ秋あき立木たちかな

机のうへ植木の鉢くろつちの黒土くろつちに萌えいづる芽あ  
り秋の夜の灯よ

秋の灯や壁にかかれる古ふる帽子ぼうし子袴こはかまのさまも身  
にしむ夜なり

富士よゆるせ今宵こよひは何の故もなう涙はてなし  
汝なれを仰ぎて

日が歩あゆむかの弓形ゆみなりのあを空ぞらの青ひとすぢの  
みちのさびしさ

悲しさのあふるるままに秋のそら日のいろ  
に似る笛吹きいてむ

山ざくら花のつぼみの花となる間のいのち  
の戀もせしかな

淋しとや淋しきかぎりはてもなうあゆませ  
たまへ如何いかにとかせむ (人へかへし)

うらこひしさやかに戀とならぬまに別れて  
遠きさまさまの人

ぬれ衣のなき名をひとにうたはれて美しう  
居るうら寂さびしさよ

春たてば秋さる見ればものごとごとに驚きやま  
ぬ腫めの若さかな

町はづれきたなき溝とよの匂ひ出づるたそがれ時とき  
をみそささい啼く

植木屋は無口のをとこ常磐樹の青き葉を刈  
る春の雨の日

船なりき春の夜なりき瀬戸なりき旅の女と  
酌みしさかづき

春の森青き幹ひくのかぎりの音と木の香と  
簾うぐひすと



ただひとり小野<sup>の</sup>の樹に倚り深<sup>ふか</sup>みゆく春のゆ  
ふべをなつかしむかな

わだつみのそこひもわかぬわが胸のなやみ  
知らむと啼くか春の鳥

ゆく春の月のひかりのさみどりの遠<sup>とほ</sup>をさま  
よふ悲しき聲よ

雲ふたつ合はむとしてはまた遠く分れて消  
えぬ春の青ぞら

眼とづればこころしづかに音をたてぬ雲遠  
見ゆる行く春のまど

鶯のふと啼きやめばひとしきり風わたるな  
り青木が原を

椎の樹の暮れゆく蔭の古軒の柱より見ゆ遠  
山を焼く

春來ては今年も咲きぬなにといふ名ぞとも  
知らぬ背戸の山の樹

町はづれ煙筒もるる青煙のにほひ迷へる春  
木立かな

われはいま暮れなむとする雲を見る街は夕  
の鐘しきりなり

淋しくばかなしき歌のおほからむ見まほし  
さよと文ふみかへし來きぬ

人どよむ春の街ゆきふとおもふふるさとの  
海の鷗啼く聲

街の聲うしろに和なごむわれらいま潮しほさす河の  
春の夜を見る

春の夜や誰ぞまだ寝ぬ厨くちやなる甕かめに水さす音ね  
のしめやかに

春の夜の月のあはさに厨くちやの戸誰が開あけすて  
し灯ひのながれたる

日は寂し萬樹の落葉はらはらに空の沈黙を  
うちそそれども

見よ秋の日のもと木草ひそまりていま凋落  
の黄を浴びむとす

鍬をあげまた鍬おろしこつこつと秋の地を  
堀る農人どもよ

うすみどりうすき羽は根ね着きるささ蟲むしの身みがま  
へすあはれ鳴なきいづるらむ

うつろなる秋のあめつち白はく日じつのうつろの光  
ひたあふれつつ

秋眞晝青あきまひるあおきひかりにただよへる木立きだてがくれ  
の家に雲くも見る

落日くぐりつや街まちの塔たふの上へ金色こんじきに光れど鐘はなほ鳴  
りいでず

啼なきもせぬ白羽しらばの鳥よ河口かはぐちは赤う濁りて時し  
雨晴ぐれれし日

さらばとてさと見み合あせし額髪ぬかがみのかげなる瞳ひとみ  
えは忘れめや (二首秀環との別れに)



別れてしそのたまゆらよ虚うつろなる双まろのわが眼  
にうつる秋の日

いま暝とぢむ寂しき瞳ひとみ明らかひとみに君は何をかう  
つしたりけむ (途中大阪にかれは逝きぬ)

短みぢかかりし君がいのちのなかに見ゆきはまじ  
知らぬ清きよきさびしさ

窓ちかき秋の樹の間に遠白き雲の見え來て  
寂しき日なり

酒の香の戀しき日なり常磐樹に秋のひかり  
をうち眺めつつ

見てあれば一葉先づ落ちまた落ちぬ何事も  
ふとや夕日の大樹

をちここに亂れて汽笛鳴りかはすああ都會  
よ見よ今日もまた暮れぬ

海の聲断えむとしてはまた起る地に人は生  
れまた人を生む

人といふものあり海の眞蒼なる底にくぐり  
て魚をとりて食む

山茶花は咲きぬこぼれぬ逢ふを欲りまたほ  
りもせず日經ぬ月經ぬ

遠山の峰の上にきゆるゆく春の落日のごと  
戀ひ死にも得ば

秋の夜やこよひは君の薄化粧さびしきほど  
に静かなるかな

世のつねのよもやまがたり何にさは涙さし  
ぐむ灯のかげの人

君去いにてもものこほんの小本のちらばれるうへにし  
づけき秋の灯ともしよ

いと遠き笛を聴くがにうなだれて秋の灯ひの  
まへものをこそおもへ

相見ればあらぬかたのみうちまもり涙たた  
えしひとの瞳よ

君は知らじ君の馴な寄よるを忌いむごときはかな  
ごころのうらさびしさを

落葉た焚たくあをさけむりはほそほそと木の間  
を縫ゆひて夕空ゆふぞらへ行く

静けさや君が裁縫しこの手をとめて菊見るさま  
をふと思ふとき

相見ねば見む日をおもひ相見ては見ぬ日を  
思おもふさびしきころ

ふとしては君を避けつつただ一人泣くがう  
れしき日もまぢるかな

黄に匂ふ悲しきかざり思ひ倦<sup>う</sup>じ對<sup>むか</sup>へる山の  
秋の日のいろ

一<sup>ひと</sup>葉<sup>は</sup>だに揺れず大<sup>おほ</sup>樹<sup>き</sup>は夕ぐれのわが泣く窓  
に押しせまり立つ

旅ゆきてうたへる歌をつぎにまさめたり、思

ひ出にたよりよかれとて



山の雨しばしば軒の椎しほの樹にふりきてなが  
き夜の灯ともしかな　（百草山にて）

立川の驛ゑきの古茶屋さくら樹きの紅葉もみぢのかげに  
見おくりし子よ

旅人は伏目ふしめにすぐる町はづれ白壁ぞひに咲  
く芙蓉かな　（日野にて）

家いへにつづく有あり明あけ白はくき萱かや原はらに露つゆさはなれや鶉うずら  
しば啼なく

あぶら灯ひやすすき野のはしる雨あめ汽き車くるまにほほけ  
し顔かほの十じゅうあまりかな

戸かどをくれば朝あさ寝いの人の黒くろかみに霧きりながれよ  
る松まつなかの家いへ (三首御獄にて)

霧ふるや細目ほそめにあけし障子さうじよりほの白き秋  
の世の見ゆるかな

霧白ししとしと落つる竹たけの葉はの露ひねもす  
や月となりにけり

野の坂の春の木立こだちの葉がくれに古き宿見しゆくゆ  
武藏むさしの青梅あうめ

なつかしき春の山かな山すそをわれは旅び  
と君おもひ行く　（五首高尾山にて）

思ひあまり宿の戸押せば和なごやかに春の山見  
ゆうち泣かるかな

地つちふめど草鞋わらぢ聲なし山ざくら咲きなむとす  
る山の静けさ

山静けし峰をの上へにのこる春の日の夕かけ淡  
しあはれ水の聲

春の夜の匂へる闇のをちこちによこたはる  
なり木きの芽めふく山

汽車過ぎし小野の停車場ていしやば春の夜を老いし驛  
夫のたたずめるあり

日のひかり水のひかりの一いろに濁れるゆ  
ふべ大利根わたる

大河よ無限ひげんに走れ秋の日の照る國ばらを海  
に入るなかれ

松の實や楓の花や仁和寺にんなじの夏なほわかし山  
ほととぎす (京都にて)

けふもまたころの鉦かねをうち鳴しうち鳴し  
つつあくがれて行く　（九首中國を巡りて）

海見ても雲あふぎてもあはれわがおもひは  
かへる同じ樹蔭こかげに

幾山河いくやまかは越えさり行かば寂しさの終はてなむ國  
ぞ今日けふも旅ゆく

峽縫<sup>かひ</sup>ひてわが汽車走る梅雨<sup>つゆ</sup>晴<sup>はれ</sup>の雲さはなれ  
や吉備<sup>きび</sup>の山山<sup>やまやま</sup>

青海はにほひぬ宮の古ばしら丹<sup>に</sup>なるが淡<sup>あは</sup>う  
影うつすとき (宮島にて)

はつ夏の山のなかなるふる寺の古塔<sup>こた</sup>のもと  
に立てる旅びと (山口の瑠璃光寺にて)



桃柑子<sup>かうじ</sup>芭蕉の寶賣る磯街<sup>いそまち</sup>の露店<sup>よみせ</sup>の油煙<sup>ゆえん</sup>青海  
にゆく (下の圖にて)

あをあをと月無き夜<sup>よる</sup>を満ちきたりまたひき  
てゆく大海<sup>おほうみ</sup>の潮<sup>しほ</sup> (日本海を見て)

旅ゆけば腫瘦<sup>や</sup>するかゆきずりの女<sup>をんな</sup>みながら  
美<sup>よ</sup>からぬはなし

安藝の國越えて長門にまたこえて豊とよの國ゆ  
き杜鵑ほととぎす聽く (三首耶馬溪にて)

ただ戀しうらみ怒りは影もなし暮れて旅籠はたご  
の欄らんに倚るとき

白しろつゆか玉たまかとも見よわだの原青さうへゆ  
き人戀ふる身を (二十三首南日向を巡りて)

潮光<sup>しほひ</sup>る南の夏の海走り日を仰げども愁<sup>け</sup>ひ消  
やらず

わが涙いま自由<sup>ま</sup>なれや雲は照<sup>あ</sup>り潮<sup>うしほ</sup>ひかれる  
帆柱のかげ

積<sup>ひら</sup>榔<sup>う</sup>樹<sup>じゆ</sup>の古<sup>ふる</sup>樹<sup>き</sup>を想へその葉<sup>は</sup>蔭<sup>かげ</sup>海見て石に似  
る男をも (日向の青島より人へ)

山上さんじやうや目路めぢのかぎりのをちこちの河光るな  
り落日らくじつの國　（日向大隅の界にて）

椰子やしの實みを拾ひつ秋の海黒きなぎさに立ち  
て日にかざし見る　（三首都井岬にて）

あはれあれかすかに聲す拾ひつる椰子のう  
つろの流れ實吹けば

日向の國都井とみの岬みさきの青潮に入りゆく端はたに獨  
り海見る

黄昏たそがれの河を渡るや乗合のりあひの牛うし等鳴らと出ぬ黄きの  
山の雲

酔よひ痴しれて酒袋さかぶくろ如なすわがむくろ砂に落ち散  
り青海を見る

船はてて上のほれる國は満天まんてんの星くづのなかに  
山匂ひ立つ　（日向の油津にて）

山聳ゆ海よこたはるその間あひに狭せましま白し夏  
の砂原すなはら

遊君いうくんの紅あかき袖ふり手をかざしをとこ待つら  
む港早や來よ

南國なんごくの港のほこり遊君あそびの美みなるを見よと帆  
はさんざめく

大らねり風かぜにさからひ青うゆくそのいただ  
きの白玉しらたまの波

大隅おほぐもの海を走るや乗合のりあひの少女をとめが髪かみのよく匂  
ふかな

船醉ふねそひのうら若き母の胸に倚より海をよろこぶ  
やよみどり兒よ

落日や白く光りて飛魚とびうをのとぶ聲しげし秋風あきかぜ  
の海

港口みなとぐち夜の山そびゆわが船のちひさなるかな  
沖さして行く



帆柱ぞ寂然<sup>じやくねん</sup>としてそらをさす風死せし白晝<sup>ひる</sup>  
の海の青さよ

かたかたとかたき音して秋更けし沖の青な  
み帆のしたにうつ

風ひたと落ちて真鐵<sup>まがね</sup>の青空ゆ星ふりそめぬ  
つかれし海に

山かげの關に吸はれてわが船はみなとに入  
りぬ汽笛長う鳴る

夕さればいつしか雲は降り來て峯に寢るな  
り日向高千穂

秋の蟬うちみだれ鳴く夕山の樹蔭に立てば  
雲のゆく見ゆ

樹間こまがくれ見居みをれば阿蘇あその青烟あせむはかすかに  
きえぬ秋あきの遠空とほぞら  
(以下七首阿蘇にて)

山鳴やまなりに馴なれては月の白しろき夜よをやすらに眠ねる  
肥ひの國くに人びとよ

ひれ伏ふして地の底そことほき火ひを見みると人の五ご  
つが赤あかかりし面おもて

麓野ふもとの國にすまへる萬人を軒に立たせて阿  
蘇荒るるかな

風かぜさやさや裾野すその秋の樹にたちぬ阿蘇の月つき  
夜よのその大きさを

むらむらと中ぞら掩ふ阿蘇山のけむりのな  
かの黄なる秋の日

秋のそらうらぶれ雲は霧のごと阿蘇につど  
ひて凧ぎぬる日なり

海の上<sup>へ</sup>の空に風吹き陸<sup>くわ</sup>の上の山に雲居り日  
は帆のうへに (六首周防灘にて)

やや赤む暮<sup>は</sup>雲<sup>うん</sup>を遠き陸<sup>くわ</sup>の上<sup>へ</sup>にながめて秋の  
海馳するかな

落日らくじつのひかり海去り帆をも去りぬ死せしか  
風はまた眉まゆに來ず

夕雲ゆふぐみのひろさいくばくわだつみの黒きを掩おほ  
ひ日を包み燃ゆ

雲は燃え日は落つ船の旅びとの代赭たいしやの面つらの  
その沈黙ちんもくよ

水に棲み夜光る蟲は青やかにひかりぬ秋の  
海匂ふかな

津の國は酒の國なり三夜二夜飲みて更らな  
る旅つづけなむ

杯を口にふくめば干すぢみな髪も匂ふか身  
はかるらかに

白雲しらくものかからぬはなし津の國の古塔に望む  
初秋の山　（四天王寺に登りて）

山行けば青の木草きぐさに日は照れり何に悲しむ  
わがこころども　（箕面山にて）

泣真似なきまねの上手じやうづなりける小女こをんなのさすがなりけ  
り忘られもせず



浪華女なみはめに戀こひすまじいぞ旅人よただ見て通れ  
そのながしめを

われ車くるまに友ともは柱はしらに一語ひとこと二語ふたこと酔語よひことかはして別  
れ去さりにけり (大阪おさかに菟水うづみづと別わかる)

酔ようて入り酔ようて浪華なみはを出でてて行く旅たびびと  
に降ふる初秋はつあきの雨あめ

昨日飲みけふ飲み酒に死にもせで白痴笑ひ  
しつとなほ旅路ゆく

住吉は青のはちす葉白の砂秋たちそむる松  
風の聲

秋雨の葛城越えて白雲のただよふもとの紀  
の國を見る

火事の火の光り宿<sup>やど</sup>して夜の雲は赤う明<sup>あか</sup>りつ  
空流れゆく　（二首和歌山にて）

町の火事雨雲おほき夜の空にみだれて鷺の  
啼きかはすかな　（紀の國青岸にて）

ちんちろり男ばかりの酒の夜をあれちんち  
ろり鳴さいづるかな

紀の川は海に入るとて千本の松のなかゆく  
その瑠璃の水

麓には潮ぞさしひく紀三井寺木の間の塔に  
青し古鐘

一の札所第二の札所紀の國の番の御寺をい  
ざ巡りてむ

粉河寺こかはでらへんろ遍路の衆のうち鳴らす鉦鉦さこゆ秋  
の樹の間に

鉦鉦のなかにたたずみ旅びとのわれもをろ  
がむ秋の大寺

旅人よ地に臥せ空ゆあふれては秋山河にい  
ま流れ来る (葛城山にて)

鐘おほき古<sup>ふる</sup>りし町かな折しもあれ旅籠<sup>はたご</sup>に着  
きしその黄昏<sup>たそがれ</sup>に　　（三首奈良にて）

鐘断えず麓におこる嫩草<sup>わかぐさ</sup>の山にわれ立ち白  
晝<sup>る</sup>の雲見る

雲やゆくわが地やうごく秋眞晝鉦も鳴らざ  
る古寺にして　　（三首法隆寺にて）

秋眞晝ふるき御寺にわれ一人立ちぬあゆみ  
ぬ何のにほひぞ

みだれ降る大ぞらの星そのもとの山また山  
の闇を汽車行く (伊賀を越ゆ)

峽出でて汽車海に添ふ初秋の月のひかりの  
やや青き海 (駿河を過ぐ)

草ふかき富士の裾野をゆく汽車のその食堂しよくたう  
の朝の葡萄酒

晩夏おそなつの光ひかりしづめる東京を先づ停車場に見た  
る寂しさ

——旅の歌をばり——



舌つづみうてばあめつちゆるぎ出づをかし  
や腫はや酔ひしかも

とろとろと琥珀こはくの清水津しみづの國の銘酒白鶴はくづる瓶びん  
あふれ出づ

灯ひともせばむしろみどりに見ゆる水酒みづしゅと申まを  
すを君斷えず酌しやくぐ

くるくると天地あめつちめぐるよき顔も白の瓶子へいしも  
酔ひ舞へる身も

酌しゃくとりの玉のやうなる小むすめをかかえて  
舞はむ青だたみかな

女ども手うちはやして泣上戸なきじやうこ泣上戸とぞわ  
れをめぐれる

こは笑止八重山ざくら幾人の女のなかに酔  
ひ泣く男

あな可愛ゆわれより早く酔ひはてて手枕の  
まま彼女ねむるなり

睡れるをこのまま盗みわだつみに帆あげて  
やがて泣く顔を見む

醉ひはててはただ小こをんなの帯に咲く緋ひの  
大輪だいりんの花のみが見ゆ

醉ひはてては世に憎にくきもの一も無しほとほ  
とわれもまたありやなし

ああ酔ひぬ月が嬰や子や生うむ子こ守も唄うたうたひくれ  
ずやこの膝ひざにねむ

君が唄ふ『十三ななつ』君はいつそれにな  
るかや嬰子うむかやよ

渴きはて咽喉は灰めく酔ざめに前髪の子が  
むく林檎かな

酒の毒しびれわたりしはらわたにあなここ  
ちよや泌む秋の風

石ころを蹴り蹴りありく秋の街落日黄なり  
酔醒めの眼に

もの見れば焼かむとぞおもふもの見れば消  
なむとぞ思ふ弱き性かな

黒かみはややみどりにも見ゆるかな灯にそ  
がひ泣く秋の夜のひと

立ちもせばやがて地にひく黒髪を白もとゆ  
ひに結ゆひあげもせて

君泣くか相むかひゐて言こともなき春の灯かけ  
のものの静けさに

かりそめに病めばただちに死をおもふはか  
なごこちのうれしき夕ゆふへ (四首病床にて)

死ぬ死なぬおもひ迫る日われと身にはじめ  
て知りしわが命かな

日の御神氷のごとく冷えはてて空に朽ちむ  
日また生れ來む

夙く窓押し皐月のそらのうす青を見せよ看  
護婦胸せまり來ぬ



女ありき、われと共に安房の渚に渡りぬわれその  
傍らにありて夜も晝も断えず歌ふ、明治四十年早春。

戀ふる子こ等らかなしき旅に出づる日の船をか  
こみて海鳥うみどりの啼く

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春  
の國を旅ゆく

春や白晝日はうららかに額にさす涙ながし  
て海あふぐ子の

岡を越え眞白き春の海邊のみちをはしれり  
ふたつの人車

海哀し山またかなし酔ひ痴れし戀のひとみ  
にあめつちもなし

海死せりいづくともなき遠き音の空にうご  
きて更けし春の日

ああ接吻海そのままに日は行かず鳥翔ひな  
がら死せ果てよいま

接吻くるわれらがまへにあをあをと海なが  
れたり神よいづくこに

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照  
るいざ唇くちを君

いつとなうわが肩の上にひとの手のかかれ  
るがあり春の海見ゆ

聲あげてわれ泣く海の濃こみどりの底に聲ゆ  
けつれなき耳に

わだつみの白晝ひるのうしほの濃みどりに額ひまう  
ちひたし君戀ひ泣かむ

忍びかに白鳥しらとり啼けりあまりにも風ぎはてし  
海を怨おんずるがごと

君笑めば海はにほへり春の日の八百や潮ほども  
はうちひそみつつ

わがこころ海に吸はれぬ海すひぬそのたた  
かひに瞳<sup>め</sup>は燃ゆるかな

こころまよふ照る日の海へ中ぞらへうれひ  
ぬむれる君が乳<sup>ち</sup>の邊<sup>へ</sup>

眼をとちつ君樹によりて海を聴くその遠<sup>とほ</sup>き  
音<sup>ね</sup>になにのひそむや

砂濱すなはまの丘をかをくだりて松間まつまゆくひとのうしろ  
を見て涙しぬ

ともすれば君口無しになりたまふ海な眺め  
そ海にとられむ

君かりにかのわだつみに思はれて言いひよら  
れなばいかにしたまふ

涙もつ腫ひとみつぶらに見はりつつ君かなしきを  
なほ語るかな

君さらに笑みてものいふ御み頬ほの上へにながる  
る涙そのままにして

このごろの寂しきひとに強しひむとて葡萄ぶどうの  
酒さけをもとめ來きにけり



松透まつすきて海見ゆる窓のまひる日にやすらに  
睡ねむる人の髪吸ふ

闇冷ひやえぬいやがうへにも砂冷えぬ渚に臥し  
て黒き海聴く

闇の夜の浪うちぎはの明るきにうづくまり  
ゐて蒼海あをうみを見る

空そらの日に浸しみかも響く青青と海鳴るあはれ  
青き海鳴る

海を見て世にみなし兒このわが性さがは涙わりな  
しほほゑみて泣く

白鳥しらとりは哀かなしからずや空の青海のあをにも染  
ますただよふ

夜半よはの海うみ汝なはよく知るや魂たま一つここに生き  
ゐて汝が聲を聴く

かなしげに星は降ふるなり戀こふる子等こらこよひ  
はじめて添そひ寝ねしにける

ものおほく言いはずあちゆきこちらゆきふた  
りは哀かなし貝かひをひろへる

渚ちかく白鳥群れて啼ける日の君がかほよ  
り寂しきはなし

浪の寄る眞黒き巖にひとり居て春のゆふべ  
の暮れゆくを見る

夕海に鳥啼く闇のかなしきにわれら手とり  
ぬあはれまた啼く

鳥行けりしづかに白き羽はねのしてゆふべ明あかる  
き海のあなたへ

夕やみの磯に火を焚たく海にまよふかなしみ  
どもよいざよりて來よ

春の海ほのかにふるふ額ぬか伏よせて泣く夜のさ  
まの誰が髪に似む

ことあらば消けなむとやうにわが前にひたす  
らわれをうかがふ君よ

君はいまわが思ふままよろこびぬ泣きぬあ  
はれや生くとしもなし

君よ汝なが若き生命いのちは眼をとちてかなしう睡ねむ  
るわが掌たなぞこに

わがまへに海よこたはり日に光るこのかな  
しみの何なににをののく

海岸うみぎしの松青き村はうらがなし君にすすめむ  
葡萄酒の無し

わがうたふかなしき歌やさこえけむゆふべ  
渚に君も出いで来きぬ

くちづけの終りしあとのよこ顔にうちむか  
ふ晝の寂しかりけり

いかなれば戀のはじめに斯くばかり寂しき  
ことをおもひたまへる

伏目<sup>ふしめ</sup>して君は海見る夕闇<sup>ゆふやみ</sup>のうす青の香に髪  
のぬれずや



日は海に落ちゆく君よいかなれば斯くは悲  
しきいざや禱らむ

白<sup>ひ</sup>晝<sup>る</sup>さびし木<sup>こ</sup>の間に海<sup>ま</sup>の光<sup>ま</sup>る見て眞<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>き君  
が額<sup>ぬか</sup>のうれひよ

「木の香にやいな海ならむ樹<sup>こ</sup>間<sup>ま</sup>がくれかすか  
に浪<sup>なみ</sup>の寄<sup>よ</sup>る音<sup>ね</sup>きこゆる」

幾千の白羽みだれぬあさ風にみどりの海へ  
日の大ぞらへ

いづくにか少女泣くらむその眸のうれひ湛  
えて春の海風ぐ

海なつかし君等みどりのこのそこにとともに  
来ずやといふに似て風ぐ

直吸<sup>ひたす</sup>ひに日の光<sup>かひ</sup>吸ひてまひる日の海の青燃  
ゆわれ巖にあり

海の聲そらにまよへり春の日のその聲のな  
かに白鳥の浮く

海あをし青一しづく日の瞳<sup>まみ</sup>に點<sup>てん</sup>じて春のそ  
ら匂はせむ

春のそら白鳥まへり嘴紅はしあかしついでばみてみよ  
海のみどりを

燐枝まぢすりぬ海のなぎさに倦み光る晝の日の  
もと青き魚焼く

春の河うす黄に濁り音もなう潮満つる海の  
朝風あさなぞに入る

暴風雨あとの磯に日は冴ゆなにものに驚か  
されて犬長う鳴く

白晝の海古びし青き糸のごとたえだえ響く  
寂しき胸に

月つひに吸はれぬ曉の蒼穹の青きに海の音  
とほく鳴る

手をとりてわれらは立てり春の日のみどり  
の海の無限むげんの岸に

春の海のみどりうるみぬあめつちに君が髪  
の香満ちわたる見ゆ

御みひとみは海にむかへり相むかふわれは夢  
かも御ひとみを見る

白き鳥ちからなげにも春の日の海をかけれ  
り君よ何おもふ

眞<sup>ま</sup>晝<sup>ひる</sup>時<sup>とき</sup>青海死にぬ巖<sup>いは</sup>かげにちさき貝あり妻<sup>め</sup>  
をあさり行く

夕ぐれの海の愁<sup>うれ</sup>ひのしたたりに浸<sup>ひた</sup>されて瞳<sup>め</sup>  
は遠き沖見る

蒼あそざめし額ひたいにせまるわだつみのみどりの針  
に似たる匂ひよ

海うみ明あかり天そらにえ行かず陸くがに來ず闇のそこひに  
青うふるへり

ふと袖そでに見いでし人の落おち髮がみを唇くちにあてつつ  
朝の海見る



ひもすがら断えなく窓に海ひびく何につか  
れて君われに倚る

海女の群からすのごときなか  
にゐて貝を買  
ふなりわが戀人は

渚なる木の間ゆきゆき摘み  
ためし君とわが  
手の四五の菜の花

くちつけは永かりしかなあめつちにかへり  
来てまた黒髪くろかみを見る

春の海さして船行く山かげの名もなき港晝  
の鐘鳴る

—以—

上—

窓ひとつ朧ろの空へ灯をながす大河沿おほがほぞひの春  
の夜の街

鐘鳴り出づ落日いりひのまへの擾亂ぜうらんのやや沈みゆ  
く街のかたへに

仁和寺の松の木この間まをふと思ふうらみつか  
れし春の夕ぐれ

琴弾くか春ゆくほどにもの言はぬくせつき  
そめし夕ぐれの人

大ぞらの神よいましがいとし兒の二人ふたり戀し  
て歌うたふ見よ

君を得ぬいよいよ海の涯はてなきに白帆を上げ  
ぬ何のなみだぞ

あな沈む少女の胸にわれ沈むああ聴けいづ  
く悲しめる笛

みだれ射よ雨降る征矢をえやは射るこの静  
ごころこの戀ごころ

吹き鳴らせ白銀の笛春ぐもる空裂けむまで  
君死なむまで

君笑<sup>え</sup>むかああやごとなし君がまへに戀ひ狂  
ふ子の狂ひ死ぬ見て

山動け海くつがへれ一すぢの君がほつれ毛  
ゆるがせはせじ

みじろがでわが手にねむれあめつちになに  
ごともなし何の事なし

われら兩人相添うて立つ一點に四方のしじ  
まの吸はるるを聽く

思ひ倦みぬ毒の赤花さかづきにしぼりてわ  
れに君せまり來よ

矢繼早火の矢つがへてわれを射よ満ちて腐  
らむわが胸を射よ

生ぬるき戀の文かな筆もろともいざ火に焼  
かむ爐のむらむら火

胸せまるあな胸せまる君いかにとともに死な  
ずや何を驚く

千代八千代棄てたまふなと云ひすてつと  
わが手枕きはや睡るかな



針のみみそれよりちさき火の色の毒花咲く  
は誰が唇ぞくちびる

ひたぶるに木枯すさぶ斯かる夜を思ひ死なむ  
ずわが愚鈍見よぐどん

こよひまた死ぬべきわれかぬれ髪のかげな  
る眸まの満干みちひる海に

いざこの胸千々に刺し貫き穴だらけのそを  
玩もてあそべ春の夜の女

「女なればつつましやかに」「それ憎しなどわ  
れ焼やかう火の言葉せぬ」

黒髪に毒あるかをりしとしとにそそぎて侍はやく  
れ花ちるゆふべ

悲し悲し火をも啖くふと戀ひくるひ斯くやす  
らかに抱かれむこと

戀ひ狂ひからくも獲ぬる君いだき恍ほうけし顔  
の驚愕おどろきを見よ

とこしへに逃ぐるか戀よとこしへにわれ若  
うして追はむ汝を

紅梅こうばいのつめたきほどを見たまへとはや馴れ  
て君笑みて唇くちらよす

涙さびし夢も見ぬげにやすらかに寝みだれ  
姿われに添ふ見て

春は來ぬ戀のほこりか君を獲とてこの月ごろ  
の悲しきなかに

夕ぐれに音ねもなうゆらぐさみどりの柳かさ  
びしよく君は泣く

床に馴れ羽はねおとろへし白鳥のかなしむごと  
くけふも添そひ寝ねす

疑ひの野火しめじめと胸を這ふ風死せし夜  
を消えみ消えずみ

君かりにその黒髪に火の油そそぎてもなほ  
われを捨てずや

髪を焼けその眸まゆつぶせ斯くてこの胸に泣き  
來よさらば許さむ

微笑えび鋭しわれよりさきにこの胸に棲みしあ  
りやと添臥しの人

悲しきか君泣け泣くをあざわらひあざわら  
ひつつわれも泣かなむ

燃え燃えて野火のびいつしかに消え去りぬ黒め  
るあとの胸の原見よ

さらばよし別るるまでぞなにごとの難さか  
其處そこに何のねたまむ

毒の木に火をやれ赤きその炎ちぎりて投げ  
ひよく睡る人に

撒きたまへ灰を小砂利をわが胸にその荒る  
る見て手を拍ちたまへ

手枕よ髪のかをりよ添ひぶしにわかれて春  
の夜を幾つ寝し



別<sup>わか</sup>れ居<sup>ゐ</sup>の三<sup>み</sup>夜<sup>よ</sup>は二<sup>ふた</sup>夜<sup>よ</sup>はさこそあれか  
がなひ  
て見<sup>み</sup>よはや十<sup>と</sup>日<sup>か</sup>經<sup>へ</sup>む

思<sup>おも</sup>ふまま怨<sup>か</sup>言<sup>ご</sup>つらねて彼<sup>か</sup>女<sup>れ</sup>がまへに泣<sup>な</sup>きは  
え臥<sup>ふ</sup>さで何<sup>なに</sup>を嘲<sup>あざ</sup>むや

君<sup>きみ</sup>よなどさは愁<sup>う</sup>れたげの腫<sup>は</sup>して我<sup>われ</sup>がひとみ  
見るわれに死<sup>し</sup>ねとや

ただ許せふとして君に飽きたらず忌む日  
もあれどいませくであり

あらら可笑し君といだきて思ふこといふこ  
となきにこの涙はや

毒の香君に焚かせてもろともに死なばや春  
のかなしき夕

あめつちに乾<sup>か</sup>びて一つわが唇も死して動か  
ず君見ぬ十日

事もなういとしづやかに暮れゆきぬしみじ  
み人の戀しきゆふべ

かへれかへれ怨<sup>み</sup>じうたがひに倦みもせばい  
ざこの胸へとく歸り來よ

あなめはれ君もいつしか眼まゆ盲ひぬわれも盲めし  
人の相いだき泣く

この手紙がみ赤き切手きってをはるにさへこころとき  
めく哀かなしきゆふべ

さらば君いざや別れむわかれてはまたあひ  
は見じいざさらばさらば

君いかにかかる静けき夕ぐれに逝いきなば人  
のいかに幸さちあらむ

夕ぐれの静寂しじましとしと降る窓にふと合ひぬ  
唇くちのいつまでとなく

戀しなばいつかは斯る憂うきを見むとおもひし  
昨きのこのはるかなるかな

わりもなう直ひたよろこびてわが胸にすがり泣  
く子が髪のやつれよ

心ゆくかぎりをこよひ泣かしめよものな言  
ひそね君見むも憂し

添臥そひに馴れしふたりの言ことも無うかなしむ家  
に櫻咲くなり

「君よ君よわれ若し死なばいづくにか君は行  
くらむ」手をとりにていふ

春哀し君に棄てられはるばると行かばや海  
のあなたの國へ

知らず知らずわが足鈍る君も鈍る戀の木立  
の静寂のなかに

怨むまじや性は清水しみづのさらさらに淺かる君  
をなにくらむべき

戀人よわれらはさびし青ぞらのもとに涯はてな  
う野の燃ゆるさま

われ歌をうたへりけふも故わかぬかなしみ  
どもにくら追はれつつ



みな人にそむきてひとりわれゆかむわが悲  
しみはひとにゆるさじ

君見ませ泣きそぼたれて春の夜の更けゆく  
さまを眞黒き樹樹を

雪暗うわが家つつみぬ赤赤と炭燃ゆる夜の  
君が髪かみの香か

然<sup>ま</sup>なり先<sup>ま</sup>づ春消<sup>え</sup>のこる松<sup>まつ</sup>が枝<sup>え</sup>の白<sup>しろ</sup>の深<sup>み</sup>雪<sup>ゆき</sup>  
の君<sup>きみ</sup>とたたへむ

君<sup>きみ</sup>來<sup>こ</sup>ずばこがれてこよひわれ死<sup>し</sup>なむ明<sup>あ</sup>日<sup>す</sup>は  
明<sup>あ</sup>後<sup>さ</sup>日<sup>て</sup>は誰<sup>たれ</sup>知<sup>ら</sup>む日<sup>ひ</sup>ぞ

泣<sup>な</sup>きながら死<sup>し</sup>にて去<sup>い</sup>にけりおん胸<sup>むね</sup>に顔<sup>かほ</sup>うづ  
めつつ怨<sup>うら</sup>みむし子<sup>こ</sup>は

おもひみよ青海あをうみなせるさびしさにつつまれ  
ゐつつ戀ひ燃ゆる身を

戸とな引きそ戸との面おもは今しゆく春はるのかなしさ  
満みてり來きよ何か泣なく

狂くるひつつ泣なくと寢ねざめのしめやけき涙なみだいづ  
れが君きみは悲かなしき

鳥は籠<sup>かご</sup>君は柱にしめやかに夕日を浴<sup>あ</sup>びぬな  
ど啼かぬ鳥

煙たつ野ずえの空へ野樹<sup>の</sup>いまだ芽<sup>き</sup>ふかぬ春  
のうるめるそらへ

はらはらに櫻みだれて散り散れり見ゐつつ  
何のおもひ湧かぬ日

蛙鳴く耳をたつればみんなみにいなまた西  
に雲白き晝

朱の色の大鳥あまた浮きいでよいま晩春の  
日は空に饅ゆ

あな寂し縛められて默然と立てる巨人の石  
彫まばや

つかれぬる胸に照り來てほのかをるゆく春  
ごろの日のにほひかな

田のはづれ林のうへのゆく春の雲の静けさ  
蛙鳴くなり

汪洋と濁れる河のひたながれ流るるを見て  
眼をひらき得ず

酔ひはてぬわれと若さにわが戀にこころな  
にぞも然しかは悲しむ

聳そびやげる皐月のそらの樹の梢うへに幾すぢ青の  
糸ひくか風

わくら葉か青さが落ちぬ水み無な月つきの死しぬる  
白晝ひるの高檜たかひの樹ゆ

鷺ぞ啼く皐月の朝の浅みどり揺れもせなく  
や鷺空そらに啼く

水ゆけり水のみぎはの竹なかに白鷺啼けり  
見そなはせ神

いと幽かすけく濃こ青あその白ひ日るの高ぞらに鷺啼くさ  
こゆ死つらにゆくか地つら



一すぢの糸の白雪富士の嶺に残るが哀しみ  
無月の天

風わたる見よはつ夏のあを空を青葉がうへ  
をやよ戀人よ

山を見き君よ添寝の夢のうちに寂しかりけ  
り見も知らぬ山

人棲まで樹樹のみ生おひしかみつ代のみどり  
照らせし日か天そらをゆく

われ驚くかすかにふるふわだつみの青さを  
眺めわが脉搏みやくはくに

掟おきてられて人てふものの爲すべきをなしつ  
つあるに何のもだえぞ

地のうへに生いけるものみな死にはてよわれ  
ただ一人日を仰ぎ見む

われ敢て手もろごかさず寂じやくねん然とよこたはり  
ゐむ燃えよ悲しみ

われ死なばねがはくあとに一點てんのかけもと  
どめで日にいたりてむ

雲見れば雲に木見れば木に草にあな悲しみの  
かけ燃えわたる

わが胸の底の悲しみ誰知らむただ高笑ひ空  
なるを聞け

むしろわれけものをねがふ思ふまま地の上  
這ひ得るちからをねがふ

かなしみは死しにゆきただち神しにゆきただひ  
とすぢに久く遠えんに走る

あれ行くよ何の悲しみ何の悔い犬にあるべ  
き尾をふりて行く

天あまの日に向ひて立つにたへがたしいつはり  
にのみ満ちみてる胸

山の白晝<sup>ひる</sup>われをめぐれる秋の樹の不斷<sup>ふた</sup>の風  
に海の青憶<sup>おも</sup>ふ

月光<sup>げっこう</sup>の青のうしほのなかに浮きいや遠ざか  
り白鷺<sup>しらぎ</sup>の啼く

月の夜や君つつましうねてさめず戸<sup>と</sup>の面<sup>も</sup>の  
木立風真<sup>ま</sup>白<sup>しろ</sup>なり

十五夜の月は生絹きぎぬの被衣かつぎして男をみなおとこの寢  
し國をゆく

白晝ひるのごと戸との面おもは月の明あかう照るこは灯ひ  
の國くに君とぬるなり

君睡ねれば灯の照るかぎりしづやかに夜は匂  
ふなりたればなの花

寢すがたはねたし起すもまたつらしとつち  
いつして蟲を聽くかな

ふと蟲の鳴く音たゆれば驚きて君見る君は  
美しう睡る

君ぬるや枕のうへに摘まれ來し秋の花ぞと  
灯は匂やかに



美しうねむれる人にむかひゐてふと夜ぞか  
なし戸に月や見む

眞晝日のひかりのなかに燃えさかる炎ほのかか哀かな  
しわが若さ燃ゆ

狂ひ鳥はてなき青のおほぞら大空に狂へるを見よく  
るへる女

玉ひかる純白ましろの小鳥たえだえに胸むねに羽はねうつ  
寂しき眞晝

秋の風木立にすさぶ木のなかの家の灯かげ  
にわが脈みやくはうつ

つとわれら黙もだしぬ灯かげ黒かみのみどりは  
匂ふ風過ぎて行く

われらややに頭かうべをたれぬ胸二つ何をか思ふ  
夜風よかぜ遠く吹く

風消えぬ吾もほほゑみぬ小夜さよの風聽きゐし  
君のほほゑむを見て

つと過ぎぬすぎて聲なし夜よるの風かぜいまか静か  
に木この葉はちるらむ

風落ちぬつかれて樹樹の風ぎしづむ夜を見  
よ少女さびしからずや

風風ぎぬ松と落葉の木この叢むらのなかなるわが  
家いざ君よ寝む



自明治四十一年四月

至同 四十三年一月

いざ行<sup>ゆ</sup>かむ行き<sup>き</sup>てまだ見ぬ山を見むこのさ  
びしさに君は耐<sup>た</sup>ふるや

いづくよりいづくへ行くや大空おほぞらの白雲しろくものご  
と逝いきし君はも（三首獨歩氏を悼む）

仰あふぎみる御そら庭にはの樹きあめつちの冷ひやかなり  
や君はゐまさず

君ゆけばむらがりたちて静しづけさの盡つくるを  
知らず君追ふとおもふ

みんなみの軒端のきはのそらに日輪にちりんの日ごとかよ  
ふを見て君と住む

おのづから熟うみて木の實みも地に落ちぬ戀の  
きはみにいつか來にけむ

女あり石に油をそそぎては石焼かむとす見  
るがさびしき



いざ行かむ行衛<sup>ゆゑ</sup>は知らねとどまらばかなし  
かりなむいざ君よ夙く

若ければわれらは哀<sup>かな</sup>し泣きぬれてけふも  
うたふよ戀ひ戀ふる歌

うらかなしこがれて逢ひに來<sup>こ</sup>しものを驚き  
もせてひとのほほゑむ

悲しまず泣かずわらはぬ晝夜ひるよるに馴れしかい  
まはさびしくもなし

うちしのび夜汽車よぎしゃの隅にわれ座しぬかたへ  
に添ひてひとのさしぐむ　（以下或る時に）

野のおくの夜の停車場ていしゃばを出てしときつとこ  
そ接吻くちずをかはしてしかな

摘みてはすて摘みてはすてし野のはなの我  
等があとにとほく續きぬ

山はいま遅き櫻のちるころをわれら手とり  
て木の間あゆめり

鬢びんの毛に散りしさくらのかかるあり木このか  
げ去らぬゆふぐれのひと

木の芽摘みて豆腐の料理君のしぬわびしか  
りにし山の宿かな

春の日の満てる木の間のうち立たすおそろ  
しきまでひとの美し

小鳥よりさらに身かろくうつくしく哀しく  
春の木の間ゆく君

静かなる木の間にもに入りしときこころ  
しきりに君を憎めり

君すててわれただひとり木の間より岡にい  
づれば春の雲見ゆ

山の家やまのいえの障子しょうじ細目ほそめにひらきつつ山見るひと  
をかなしくぞ見し

ゆく春の山に明<sup>あかる</sup>う雨かぜのみだるるを見て  
さびしむひとよ

狭<sup>ま</sup>みどりのうすき衣<sup>ころも</sup>をうら着<sup>き</sup>せむくちづけ  
はてて夢見るひとに　（以上）

古寺の木立<sup>こたち</sup>のなかの離<sup>はな</sup>れ家<sup>や</sup>に棲<sup>す</sup>みて夜ごと  
に君を待ちにき

ものごしに静けさいたく見えまざるひとと  
棲みつつはつ夏に入る

樹樹キキの間に白雲見ゆる梅雨つゆ晴はれの照る日の庭  
に妻は花植うう

くちつけをいなめる人はややとほくはなれ  
て窓に初夏しよかの雲見る

わが妻はつひにうるはし夏たてば白き衣きぬき  
てややや瘦せてけり

香爐かうろささげ初夏はつなつの日のわらはたち御みそらあ  
ゆめり日の静かなる

はつ夏の雲あをそらのをちかたに湧きいづ  
る晝麥の笛吹く



燐<sup>ホ</sup>枝<sup>チ</sup>すりぬ赤<sup>ニ</sup>き毛<sup>ケ</sup>蟲<sup>ムシ</sup>を焼<sup>キ</sup>かむとてただ何と  
なくくるしきゆふべ

とこしへに解<sup>ト</sup>けぬひとつの不可思議の生き  
てうごくみづかと自らをおもふ

はたた神遠鳴りひびき雨降らぬ赤きゆふべ  
をひとり酒煮る

夕されば風吹きいでぬ闇のうちの樹梢こゝろ見る  
つつまたおもひつぐ

夕やみのややに明るみ大ぞらに月のかかれ  
ばやや思おもひ風ぐ

ひとりなればこのもちつきの夏の夜のすず  
しきよひをいざひとり寝む

八月の初め信州輕井澤に遊びぬ、その頃詠め

る歌三十首。

火を噴<sup>ふ</sup>けば淺間の山は樹を生<sup>う</sup>ま<sup>ず</sup>茫<sup>ぼう</sup>として  
立つ青<sup>あを</sup>天<sup>あめ</sup>地<sup>つち</sup>に

天地の靜寂<sup>しじま</sup>わが身にひたせまるふもと野に  
居て山の火を見る

八月や淺間が嶽の山すそのその荒原あれはらにとこ  
なつの咲く

麓なる山のひとつのいただきの青深あをふかくさ草に寝  
て淺間見る

夢も見ず旅寝かさねぬ火の山の裙の月夜の  
白きいくよ幾夜を

火の山の裾の松原月かげの疎あまき月夜をほと  
とぎす啼く

火の山やふもとの國に白雲の居る夜のそら  
の一すぢの煙けむ

大ぞらに星のふる夜を火の山の裾に旅寝し  
妻をしぞ思ふ

夜となればそらを掩ひて高く見ゆ白晝まひるは低  
しけむり噴く山

火の山にしばし煙の斷えにけりいのち死ぬ  
べくひとのこひしき

女ありみやこにわれを待つときく静かなり  
けり山の火を見る

月見草見ゐつつ居ればわかれ來し妻が物思  
ふすがたしぬばゆ

黒髪くろかみのそのひとすぢのこひしさの胸になが  
れて盡つきむともせず

わかれ來て幾いく夜よ經ぬると指折れば十と指ゆびに足  
らず夜よのながさかな

ゆるしたまへ別れて遠くなるままにわりな  
きままにうたがひもする

青草のなかにまぢりて月見草つきみぐさひともと咲く  
をあはれみて摘む

あめつちにわがあ選音おとのみ満ちわたる夕ゆふべの野  
なり月見草摘む



ものをおもふ四方よもの山べの朝ゆふに雲を見  
れどもなぐさみもせず

紅べに滴したる桃ももの實みかみて山すその林ゆきつつ火  
の山を見る

蟲に似て高原たかはらはしる汽車のありそらに雲見  
ゆ八月の晝

白雲しらくものいざよふ秋の峯をあふぐちひさなる  
かな旅人どもは

糸のごとくそらを流るる杜鵑とけんあり聲にむか  
ひて涙とどまらず

うつろなる命をいだし眞晝まひる野にわが身うご  
めさ杜鵑ほととぎす聽く

ほととぎす聴きつつ立てば一滴ひとたまのつゆより  
寂しわが生くが見ゆ

わかれては十日ありえずあわただしまた碓うす  
氷み越え君見むと行く

胸にただ別れ來こしひとしのばせてゆふべの  
山をひとり越ゆなり

瞰<sup>み</sup>下<sup>おろ</sup>せば霧に沈めるふもと野の國のいづく  
ぞほととぎす啼く

身じろがずしばしがほどを見かはせり旅の  
をとこと山の小蛇<sup>こへび</sup>と

秋かぜや碓氷のふもと荒れ寂びし坂本<sup>さかもと</sup>の宿<sup>しゆく</sup>  
の糸綵<sup>いとくさり</sup>の唄（坂本に宿りて）

まひる日の光のなかに白雲はうづまきてあ  
りふもと國原くにはら（妙義山にて）

旅びとはふるきみやこの月の夜の寺の木この  
間まを飽かずさまよふ（三首奈良にて）

はたご屋へ杜もりの木の間の月の夜の風のあは  
れに濡れてかへりぬ

伏しをがみふしをがみつつ階きざはしのゆふべのや  
みにきえよとぞおもふ

大いなるうねりに船の載のれるとき甲板かうはんにゐ  
て君をおもひぬ (播磨灘にて)

戀人のうまれしといふ安藝の國の山の夕日ゆふひ  
を見て海を過ぐ (瀬戸にて)

とき折りに淫唄ざんうたうたふ八月の燃ゆる濱ゆき  
燃ゆる海見て　（五首故郷にて）

峰あまた横ほり伏せる峽間せきまの河越えむとし  
蝸ひぐらしを聴く

父の髪母の髪みな白み來ぬ子はまた遠く旅  
をおもへる

雲去ればもののかげなくうす赤き夕日ゆよひの山  
に秋風ぞ吹く

星くづのみだれしなかにおほどかにわが帆ほ  
柱はしらのうち揺ゆぐ見ゆ

蓄音機ちくおんきふとしも船の一室いつしつに起るがきこゆ海  
かなしけれ



なにもものに欺あざむかれ來こしやこの口くちごろ口くち惜あし  
腹はら立たたし秋風を聽きく

秋立てどよそよそしくもなりにけり風は吹  
けども葉は落つれども

とも思ひかくもおもへどとにかくにおもひ  
さだめて幸祝さいはひせむ

いねもせて明かせる朝の秋かぜの聲にまぢ  
りてすすめ子の啼く

うらさびし盡つきなく行ける大河おほかはのほとりに  
ゆきて泣かむとぞおもふ

聞うれしこよひ籬かきね根のこほろぎの身にしむ  
ままに出いでて聴くかな

霧ふればけふはいつより暮くれはやきゆふべな  
りけりこほろぎの鳴く

時として涙をおぼゆ草木くさうもくの悠悠として目を  
浴あぶる見て

消えやらぬ大あめつちの生物いきもののひとつのわ  
れに秋かぜぞ吹く

君がすむ戀の國邊とわが住める國のさかひ  
の一すぢの河

白粉と髮のにほひをさきわけむ静かなる夜  
の黄なるともしび

夕ぐれの街をし行けばそそくさと行きかふ  
人に眼も鼻も無し

わが胸に旅のをとこの情じょうなしのころやど  
りてそそのかすらく

物おもへばこの茫ぼう漠ぼくのあめつちにわれただ  
獨り生くとさびしき

秋たてば街のはづれの檜ひの木この木立たちに行き  
てよくものをおもふ

わがこころ行くにまかせてゆかしめよ世に  
これよりのなぐさめは無し

蠟燭ろうそくの灯の穂赤きをつくづくと見つめゐて  
ふと秋風をさく

めぐりあひしづかに見守まもりなみだしぬわれ  
とわれとのこころとこころ

秋晴あきはれのまちに逢あひぬる乞食こじきの爺おやの眸まぶ見て旅  
をおもひぬ

牛うしに似てもものもおもはず茫然と家を出づれ  
ば秋かぜの吹く

野菊のぎくぞとさも媚こびなよるすがたして野に咲  
く見れば行きもかねつる

湯槽ゆづねより窓のガラスにうつりたる秋風あきかぜのな  
かの午後ごごの日を見る

落初おちぞめの桐のひと葉のあをあとひろきが  
うへを夕風ゆふかぜのゆく

人の聲車こゑぐるまのひびき満ちわたるゆふべの街に  
落葉するなり



秋かぜは空そらをわたれりゆく水はたゆみもあ  
らず葦刈あしかりる少女をとめ

足とめて聽きけばかよひ來く河かむかひ枯葦かれあしのな  
かの葦刈あしかりの唄

魚釣いそるや晚取おそあき河かはのながれ去り流れさる見つ  
つ餌えは取られがち

わだの原生うまれてやがて消えてゆく浪のあを  
きに秋かぜぞ吹く

相むかひ世に消えがたきかなしみの秋のゆ  
ふべの海とわれとあり

ゆふぐれの沖には風が行くあらむ屍むくろのごと  
く松にもたるる

音もなうゆふべの海のをちかたの闇のなか  
ゆく白き波見ゆ

行き行きて飽あきなば旅にしづやかにかへり  
みもなく死なむとぞおもふ

ひたすらに君に戀こひしぬ白菊も紅葉もみぢも秋はも  
ののさびしく

病みぬれば世のはかなさをとりあつめ追は  
るるがごと歌につづりぬ

あれ見たまへこのもかのもの物かけをしの  
びしのびに秋かぜのゆく

少女<sup>をとこ</sup>子のむねのちひさきかなしみに溺れて  
われは死にはててけり

君見れば獸けもののごとくさいなみぬこのかなし  
さをやるところなみ

なほ飽かずいやなほあかず苛さいなみぬ思ふま  
なるこの女たんなゆゑ

長椅子ながみすにいねて初冬はつふゆ午ご後の日ひを浴あぶるに似  
たる戀こひづかれかな

なにもものに追はれ引かれて斯く走るをもし  
ろきこと世に一もなし

この林檎りんごつゆしたたらばありし日のなみだ  
に似むとわかき言こといふ

あはれそのをみなはたえの肌しらずして戀のあは  
れに泣きぬれし日よ

あはれ神ただあるがままわれをしてあらし  
めたまへ他たにいのる無し

かかる時聲はりあげてかなしさを歌ふ癖くせあ  
りきそれも止やみつる

わが住むは寺の裏部うらべ屋庭やもせに白菊しろぎくさけり  
見に来よ女をんな

消えもせず戀こひの國より追はれ來こし身にうつ  
り香のあはくかなしく

見かへるな戀の世界のたふとさは揺ゆれずし  
づかに遠とほざかりゆく

世よに最もともあさはかなればとりわけて女の泣  
くをあはれとぞおもふ



黒牛くろうしの大いなる面つらとむかひあひあるがごと  
くに生いくにつかれぬ

ほこり湧わく落日いりひの街まちをひた走る電車のすみ  
のひとりをとめの少女

仰あふぎみてころぞながる街の樹の落いりひ日のそ  
らにおち葉するあり

われうまれて初めてはじめてけふぞ冬ふゆを知る落葉おちばの  
こころなつかしきかな

落ちし葉のひと葉のつぎにまた落ちむ黄きな  
る一葉の待たるるゆふべ

あめつちの静かなる時そよろそよろ落葉を  
わたるゆふぐれの風

早やゆくかしみじみ汝なれにうちむかふひまも  
なかりきさらばさらば秋

忍び来てしのびて去いにぬかの秋は盲目めしひなり  
けりものいはずけり

大河おほかはのうへをながるる一葉たよのおち葉はのごと  
しものもおもはず

わが妻よわがさびしさは青のいろ君がもて  
るは黄朽葉ならむ

めぐりあひふと見交して別れけり落葉林の  
をとこと男（月山が原にて）

冬木立落葉のうへに晝寝してふと見しゆめ  
のあはれなりしかな

武藏野は落葉の聲に明け暮れぬ雲を帯びたる日はそらを行く

ゆふまぐれ落葉のなかに見いてつる松かさの實を手にしたてみぬ

かすかなる胸さわぎあり燃え燃えぬ黄葉ふりしきる冬がれの森

いかにせむ胸に落葉おちばの落ちそめてあるがご  
ときをおもひ消しえず

ふりはらひふりはらひつつ行くが見ゆ落葉  
がくれをひとりの男

いと静かにものをぞおもふ山白びらき十二月がつこ  
そゆかしかりけれ

梢こやねより葉のちるごとくものおもひありとし  
もなきにむねのかなしき

うす赤く木枯こがらしすさぶ落日らくじつの街のほこりのな  
かにおもはく

窓まどあくればおもはぬそらにしらじらと富士  
見ゆる家いへに女すまひき

日向ひなたぼこ側そばにねむれる犬いぬの背せを撫なでつつあ  
ればさびしうなりぬ

近ちかきわたり寺てらやたづねてめぐらなむ女むすめを棄す  
ててややさびしかり

別わかれる日ひ君きみもかたらずわれ云いはず雪ゆきふる午ご  
後ごの停てい車しゃ場ばにあり



別るとして停車場あゆむうつむきのひとの片かた  
手にヴァイオロンの見ゆ

別れけり残るひとりは停車場の群集ぐんじゅうのなか  
に口笛くちぶえをふく

大鳥おほとりの空そらを行くごとさやりなき戀するひと  
も斯かくや嘆なげかむ

男おとこといふ世に大おほいなるおごそかのほこりに  
如しかむかなしみありや

ほのかにもおもひは痛いたしうす青あをの一月ひつきのそ  
らに梅うめつぼみ來きぬ

うきことの限りも知らずふりつもるこのわ  
かき日ひをいざや歌はむ

清きよければ若くしあればわがころそらへ去い  
なむとけふもかなしむ

ゆめのごとくありのすさびの戀こひもしきより  
どころなくさびしかりしゆゑ

枯かれしのち最ももあはれ深ふかかるは何花なにばなならむ  
なつかしきかな

男なれば歳とし二十五のわかければあるほどの  
うれひみな來こよとおもふ

獸けだものの病めるがごとくしづやかに運命さだめのあ  
とに従ひて行く

爪つめ延のびぬ髪も延のび來きぬやすみなく人にまぢ  
りてわれも生なくなり

狂くるひ鳥どり日を追へるよりあはれなり行衛ゆくゑも知  
らずひとの迷へる

あさましき歌のみおほくなり  
にけりもの  
の終りのさびしきなかに

一月より二月にかけて安房の渚に在りき、その頃

の歌六十九首。

ふね待ちちつ待合室の雑沓ざつたふに海をながめて巻まき  
たばこ吹く

おもひ屈くし古ぼろ船ぶねに魚買うをの群むねとまぢりて  
房州ぼうしゅうへ行く

物ものありて追はるるごとく一人ひとりの男おとこきたりぬ  
海のほとりに

病院びやういんの玻璃はり戸どに倚よれば海うみこえておぼろ夜伊  
豆まめの山やま焼やくる見ゆ

まつ風かぜの明あかるき聲こゑのなかにして女をんなをおもひ  
青海あおみを見る

なにほどのことにやあらむ夜もいねて海うみの  
ほとりに人の嘆なげくは

海に來ぬ思ひあぐみてよるべなき身はいづ  
くにも捨てどころなく

われひとり多く語りてかへり來ぬ月照る松  
のなかの家より

ともすれば略くに馴れぬる血なればとこと  
もなげにも言ひたまふかな



うす青くけふもねがての枕まくらべに這ひまつは  
れり海のひびきは

藻草もぐさ焚たく青きけむりを透すきて見ゆ裸はだか體かの海あ  
女メと暮れゆく海と

われよりもいささか高きわか松の木かげに  
立ちて君をおもへり

朝起きて煙草タバコしづかにくゆらせるしばしが  
ほどはなにも思はず

日は日なりわがさびしさはわがのなり白晝まひる  
なぎさの砂山すなやまに立つ

ここよりは海も見えざる砂山のかげの日向ひなた  
にもものをおもひぬ

いづかたに行くべきわれはここに在りこころ落ち居よわれよ不安よ

風落ちて渚木立なぎさこに満ちわたる海のひびきの  
白晝ひるのかなしみ

ささらぎや海にうかびてけむりふく寂しき  
島のうす霞がすみせり

火カの山ヤマにのぼるけむりにむかひゐてけふも  
さびしきひねもすなりき

大島の山のけむりのいつもいつも断えずさ  
びしきわがころかな

晴れわたる大ぞらのもと火の山のけむりは  
けふも白白しらしらとたつ

夕ゆふやみに白帆おろを下す大船の港入りこそやや  
かなしけれ

けふは早や戀のほかなるかなしみに泣くべ  
き身ともなりそめしかな

少年せうねんのゆめのころもはぬがれたりまこと男  
のかなしみに入る

あはれこころ荒<sup>すま</sup>みぬればか眼も見えず海を  
見れども日を仰<sup>あよ</sup>げども

人見れば忽<sup>たちま</sup>ちうすき皮を着るわが性<sup>さが</sup>ゆゑの  
盡きぬさびしさ

天地<sup>あめつち</sup>に享<sup>う</sup>けしわが性やうやうに露<sup>あは</sup>はになり  
來<sup>く</sup>海に來<sup>き</sup>ぬれば

つひにわれ薬に飽きぬ酒こひし身も世もあ  
らず飲みて飲み死なむ

やまひには酒こそ一の毒どくといふその酒ばか  
り戀しきは無し

あさましく酒をたふべて荒濱あらかはまに泣き狂へど  
も笑ふ人もなし

愚おろかなり阿あ呆ほう鳥がらすの啼なくよりもわがかなしみ  
をひとに語るは

あめつちにわが残のこし行くあしあとのひとつ  
づつぞと歌を寂さびしむ

わがこころ濁にごりて重おもきゆふぐれは軒のきのそと  
にも行くを好このまず



けふもまた變ることなきあら海の渚を同じ  
われがあゆめり

安房の國海にうかびて冬知らず紅梅こぞうめ白梅しろうめい  
まさかりなり

けふ見ればひとがするゆゑわれもせしをか  
しくもなき戀なりしかな

海に行かばなぐさむべしとひた思ひこがれ  
し海に來は來つれども

耳もなく目なく口なく手足無きあやしきも  
のとなりはてにけり

眼覺めつるその一瞬にあたらしき寂しきわ  
れぞふと見えにける

心より歌ふならねばいたづらに聲のみまよ  
ふ宵よをかなしむ

海あをくあまたの山等横伏よこぶせりわが泣くと  
ころいまだ盡つくる無し

やどかりの殻からの如ごとくに生くかざりわれかな  
しみをえは捨てざらむ

なつかしく静かなるかな海の邊の松かげの  
墓にけふも來りぬ

このごろは夜半にぞ月のいづるなりいねが  
ての夜もよくつづくかな

いつ知らず生れし風の月の夜の明けがたち  
かく吹くあはれなり

物<sup>もの</sup>かげに息をひそめて大風<sup>おほかせ</sup>の海に落ちゆく  
太陽<sup>たいやう</sup>を見る

蟹<sup>あま</sup>が家<sup>や</sup>に旅寝<sup>たびね</sup>をすれば荒海の落日<sup>いっぴ</sup>にむかひ  
風呂桶<sup>ふろか</sup>を据ゆ

蟹<sup>あま</sup>が家に旅寝<sup>たびね</sup>かさねてうす赤き櫓<sup>ほた</sup>の火<sup>ほ</sup>かけ  
に何をおもふか

白白とかがやける浪ひかる砂白晝のなぎさに  
に巻煙草吸ふ

いたづらにものを思ふとくせづきてけふも  
さびしく渚をまよふ

青海の鳥の啼くよりいや清くいやかなしき  
はいづれなるらむ

これもまたあざむきならむ「いざ行かむ清き<sup>きよ</sup>  
あなたへ」海のさそへど

砂山<sup>すなやま</sup>の起き臥ししげきあら濱のひろきに出  
でて白晝の海聴く

いと清きものあはれにおもひ入る海のほ  
とりの明る<sup>あか</sup>き木立

砂山のばらばら松の木のもとに冬の日あび  
てものをちもふは

わがほどのちひさきものかなしみの消え  
むともせず天地あめつちにあり

好すかざりし梅の白きをすきそめぬわが二十にじ  
五歳よごの春のさびしさ



をぼろおぼろ海の風げる日海こえてかなし  
きそらに白富士しろふじの見ゆ

海のあなたおぼろに富士のかすむ日は胸の  
いたみのつぬに増しにき

安房の國の朝のなぎさのさざなみの音ねのか  
なしさや遠き富士見ゆ

うちよせし浪のかたちの砂すなの上にへ残れるあ  
とをゆふべさまよふ

思おもひ倦うめば晝もねむりて夢を見きなつかし  
かりき海邊うみべの木立こだち

おぼろ夜や水田みづたのなかの一すぢの道をざわ  
めき我等われらは海へ

おぼろ夜のこれは夢かも渚にはちひさき音  
の断えずまるべる

おぼろ夜の多人數なりしそがなかのつかね  
髪なりしひとを忘れず

日は黄なり灘のうねりの濁れる日敗残者は  
また海に浮く

男なり爲すべきことはなしはてむけふもこの語に生きすがりぬる

鳥が啼く濁れるそらに鳥が啼く別れて船の甲板かうはんに在り

わかれ来て船の碇いかりのくさり綱づな錆びしがうへに腰かけて居り (以上)

このままに無口者くちなしものとなりはてむ云ふべきこ  
とはみな腹はら立たたし

おのづからころはひがみ眼もひがみ暗くらき  
かたのみもとめむとする

角つるもなく眼なき數十の黒牛くろうしにまぢりて行か  
ばややなぐさまむ

鉛なまりなすおもきころにゆふぐれの闇やみのふる  
よりかなしきは無し

ただ一つ黒きむくろぞ眼めには見ゆおもひ盡  
きては他にもものもなし

戀といふうるはしき名にみづからを欺くこ  
とにややつかれ來ぬ

いふがごと戀こひに狂くるへる身なりしがこころた  
えせずさびしかりしは

おほぞらのたそがれのかげにさそはれて  
涙あやふくなりそめしかな

なにごともこころひとつにおさめおきてひ  
そかに泣なくに如しくことは無し

あはれまたわれうち棄ててわがこころひと  
のなさけによりゆかむとす

戀もしき歌もうたひきよるべなきわが生命<sup>いのち</sup>  
をば欺かむとて

かりそめの己<sup>おの</sup>がなさけに神かけていのちさ  
さぐる見ればあはれなり



つゆほども酔ふこと知らぬうるはしき女を  
けふももてあそべども

いかにして斯くは戀ひにし狂ひにし不思議  
なりきとさびしく笑ふ

わがいのち安かりしかなひとが泣きひとが  
笑ふにうち混りゐて

心いよよ獨りをおもふ身にしみていよいよ  
ひとのなさけしげきまま

よるべなき生命いのち生命いのちのさびしさの満みてる世  
界かいにわれも生なくなり

うちたえて人の登あ音おとの無なかるべき國くにのあら  
じや行いきて死しなまし

斯くつねに胸のさわがばひろめ屋の太鼓たいこう  
ちにもならましものを

行くところとざまかうざま亂みだれたるわかき  
いのちに悔いを知らすな

酒飲まば女いだかば足たりぬべきそのさびし  
さかそのさびしさか

沈ちん丁ちやう花けみだれて咲ける森もりにゆきわが戀こひ人びとは  
死になむといふ

大おほ天あめ地つちみどりさびしくひそまりぬ若わかき男をとこの  
しづかに愁うれへる

汚けがれせずわかき男のただひとりこのあめつ  
ちをいかに歩あゆまむ

青<sup>あを</sup>わだつみ遠くうしほのひびくより深<sup>ふか</sup>しす  
るどし男のうれへる

水いろのうれひに満<sup>み</sup>てる世界なりいまわが  
おもひほしいままなる

降<sup>ふ</sup>ると見えすしづかに青き雨ぞふるかなし  
みつかれ男ねむれる

ニコライの大釣鐘おほつりかねの鳴りないてて夕ゆふさりくれ  
ばつねにたづねき

酒飲さけのまじ煙草吸はじとひとすぢに妻をいだ  
きに友のがれたり

消息せうしもたえてひさしき落魄らくはくの男をいまだ覺おぼ  
えたまふや

あらためてまことの戀をとめ行かむ來しか  
たあまりさびしかりしか

戀なりししからざりしか知らねどもうきこ  
としげきゆめなりしかな

いざ行かむいづれ迷ひは死ぬるまでさめざ  
らましをなにかへりみむ

歸らずばかへらぬままに行かしめよ旅たびに死  
ねよとやりぬころを

安房あはの國くに海のなぎさの松かげに病やみたまふ  
ぞとけふもおもひぬ

海に沿ふ松の木の間の一すぢのみちを獨ひとり  
しけふも歩むか



君が住む海のほとりの松原まつばらの松にもたれて  
歌うたうたはまし

山ざくら咲きそめしとや君が病む安房の海  
邊の松の木の間

きはみなき青わだなかにさまよへる海のひ  
びきかわれは生くなり

思ひらみ断えみ断えずみわがいのち夜半よに  
ぞ風の流るるを聴く

眞晝まひる日の小野をのの落葉をの木この間まゆきあるかな  
さかの春にかなしむ

春は來ぬ落葉きのままにしづかなる木立こたちがく  
れをそよ風かぜのふく

憫あはれまれあはれむといふあさましき戀こひの終  
りに近づきしかな

かなしきはつゆ掩おほふなくみづからをうちさ  
らしつつなほ戀こひひわたる

はや夙あくもころ覺さめぬし女おかとおもひ及およ  
ぶ日ひ死しもなぐさまず

女なればあはれなればと甲斐もなくやし  
くもげに許し來つるかな

憫れぞとおもひいたれば何はおき先づたへ  
がたく戀しきものを

逃れゆく女を追へる大たわけわれぞと知り  
て眼眩むごとし

斯くてなほ女をかばふ反逆はんぎやくのところが胸むねに  
ひそむといふは

なにか泣くみづからもわれを欺あざむきし戀なら  
ぬかは清く別れよ

唯だ彼女かれが男のむねのかなしみを解げし得えて  
去るをあはれにあもふ

林はやしなる鳥と鳥とのわかれよりいやはかなく  
も無ぶ事じなりしかな

千ち度たび戀こひ千度ちたびわかれてかの女むすめけだしや  
泣なきしこと無なかるらむ

別わかれゆきふりもかへらぬそのうしろ見み居かつ  
つ呼よばず泣なかずたたずむ

鼻はなのしたながきをほこる汝なんぢとて斯ごとくは清きよく  
も棄すてられつるか

別わかるとて冷ひえまさりゆく女をんなにはわが泣なくつ  
らのいかにうつれる

山やま奥おくにひとり獸けものの死しぬるよりさびしからず  
や戀こひの終はりは

やみがたきいきどほ憤りより棄てむとす男のまへに  
泣くな甲斐無く

かへりみてしのぶよすがにだもならぬつか斯る  
別れをいつか思ひし

報むくいなき戀に甘んじ飽く知らず汝なれをおもふ  
と誰たれか言はむや



あさましく甲斐なく怨み狂へるは命を蛇に  
吸はるるに似る

鳥去りてしろき波寄るゆふぐれの沖のいは  
ほか戀にわかれき

海のごとく男ごころ満たすかなしさを静か  
に見やり歩み去りし子

別れといふそれよりもいや耐へがたしすさ  
みし我をいかに救はむ

戀ひに戀ひうつなかりしそのかみに寧ろ  
わかれてあるべかりしを

〇わがこころ女え知らず彼女が持つあささこ  
ころはわれ掬みもせず

再びふたたびは見じとさけびしくちびるの乾かはかむとす  
る時のさびしさ

柱はしらのみ残れる寺の壞跡くみあとにまよふよりげにけ  
ふはさびしき

いつまでを待ちなばありし日のごとく胸むねに  
泣き伏し詫わぶる子を見む

詫びて來よ詫びて來よとぞむなしくも待つ  
くるしさに男死ぬべき

別れてののちの互いを思ふこと無かるべき  
なり固く誓はむ

ふとしては何も思はずいとあさきかりそめ  
ごとに別れむとおもふ

斯<sup>か</sup>くばかりくるしきものをなにゆゑに泣き  
て詫<sup>わ</sup>びしを許<sup>ゆる</sup>さざりけむ

おもひやるわが生<sup>よ</sup>のはてのいやはてのゆふ  
べまでをか獨<sup>ひと</sup>りなるらむ

やうやうにこころもしづみ別<sup>わか</sup>れての後<sup>のち</sup>のあ  
はれを味<sup>あじは</sup>はむとす

灯赤ともしき酒のまごゐもをはりけりさびしき床とこ  
に寝ねにかへるべし

冷笑れいせうすいのち死ぬべくこちよく涙ながし  
てわれ冷笑す

死ぬばかりかなしき歌をうたはましよりど  
ころなく身のなりてきぬ

これはこのわが泣けるにはあらざらむあら  
めづらしや涙なみたながるる

とりとめてなにかかなしき知らねどもとす  
ればなみだ頬ほほをながるる

わがめぐりいづれさびしくよるべなきわか  
さいのちが數かずさまよへり

さびしきはさびしきかたへさまよへりこの  
あはれさの耐へがたきかな

花つみに行くがごとくにいでゆきてやがて  
涙なみだにぬれてかへり來ぬ

櫛くしとればころいささか晴はるるとてさびし  
や人のけふも髪かみをゆふ



富士見<sup>み</sup>えき海のあなたに春<sup>はる</sup>の日の安房の渚  
にわれら立てりき

おぼろなる春<sup>はる</sup>の月の夜落葉<sup>らくたふ</sup>のかげのごとく  
もわれのあゆめり

まどかけをひきて寝ぬ<sup>ね</sup>れば春の夜の月はか  
なしく窓<sup>まど</sup>にさまよふ

首<sup>くび</sup>たかくあげては春のそらあふぎかなしげ  
に啼<sup>な</sup>く一羽<sup>は</sup>の鵝<sup>が</sup>鳥<sup>てう</sup>

街<sup>まち</sup>なかの堀<sup>ほり</sup>の小橋<sup>こはし</sup>を過ぎむとしふと春の夜  
の風<sup>かぜ</sup>に逢<sup>あ</sup>ひぬる

春の晝街をながしの三味<sup>しゃみ</sup>がゆく二階の窓の  
黄なるまどかけ

彼はよく妻ののろけをいふ男まことやすこ  
し眼尻さがりたる

春のそらそれとも見えぬ太陽のかげのほ  
とりのうす雲のむれ

ひややかに梢に咲き満ちしらしらと朝づけ  
るほどの山ざくら花

咲き満てる櫻のなかのひとひらの花はなの落つ  
るをしみじみと見る

かなしめる櫻の聲のきこゆなり咲き満てる  
大樹おほき白晝まひる風もなし

寝ざめゐて夜半よはに櫻の散るをきく枕まくらのうへ  
のさびしきいのち

海<sup>わた</sup>なかにうごける青<sup>あを</sup>の一點を眼にとこしへ  
に死せしむるなかれ

よるべなみまた懲<sup>こ</sup>りずまに萌<sup>も</sup>えそめぬあは  
れやさびしこのこひごころ

よるべなき生命<sup>いのち</sup>生命<sup>いのち</sup>が對<sup>むか</sup>ひ居のあはれよる  
べなき戀に落ちむとす

はかなかりし戀のうちなるおもひでのすく  
なき數かずを飽かずかぞふる

かへるべき時し來きぬるかうらやすしなつか  
しき地つちへいざかへらなむ

知らざりきわが眼のまへに死しにといふなつか  
しき母ははのとく待てりしを

をさな子のごとくひたすら流涕すふと死に  
なむと思ひいたりて

海の邊に行きて立てどもなぐさまず死をお  
もへどもなほなぐさまず

まことなり忘れぬたりさいざゆかむ思ふこ  
となしに天のあなたへ

根ねの知れぬかなしさありてなつかしくこ  
ろをひくに死にもかねたる

死をおもへば梢こずえはなれし落葉らくたふの地つちにゆくよ  
りなつかしきかな

ゆふ海の帆ほの上に消えしそよ風のごとくに  
この世い去いなとむぞおもふ



追はるるごと驚くひまもあらなくに別れさ  
つひに見ざるふたりは

若うして傷のみしげさいのちなり蹠蹠とし  
てけふもあゆめる

然れども時を経ゆかばいつ知らずこのかな  
しさをまた忘るべし

ふたたびはかへり來ることあらざらむさな  
りいかてかまたかへり來む

ほのかなるさびしさありて身をめぐるかな  
しみのはてにいまか來にけむ

思ふまゝ涙ながせしゆふぐれの室のひとり  
は石にかも似む

死に隣とほる戀のきはみのかなしみの一すぢみ  
ちを歩み來こしかな

故わかずわれら別れてむきむきにさびしき  
かたにまよひ入りぬる

見るかぎり友の顔かほみな死にはてしさびしき  
なかに獨りものをおもふ

おぼろ夜の停車場内の雑沓に一すぢまぢる  
少女の香あり

疲れはてて窓をひらけばおぼろ夜の嵐のな  
かになく蛙あり

ゆく春の軒端に見ゆるゆふぞらの青のにご  
りに風のうでけり

ちやるめらの遠音とほねや室へやにちらばれる密柑みかんの  
皮かはの香かを吐はくゆふべ

うしなひし夢をさがしにかへりゆく若わかさい  
のちのそのうしろかげ

わが生命いのちよみがへり來きぬさびしさにわか  
さのごとくうちふるへつつ

わが行くは海のなぎさの一すぢの白きみち  
なり盡くるを知らず

玻璃戸漏り暮春の月の黄に匂ふ室に疲れて  
かへり來しかな

ガラス戸にゆく春の風をききながら獨り床  
敷きともしびを消す

四月すゑ風みだれ吹くこよひなりみだれて  
ひとのこひしき夜なり

あめつちのみどり濃こまかき日となりぬ我われら等らさそ  
うてかなしみにゆく

また見じと思ひさだめつさりげなく静しづかかに  
ひとを見て別れ來ぬ

眞晝まひるの日ひそらに白みぬ春暮れて夏たちそむ  
る嵐のなかに

たたいっば一步踏みもたがへて西ひがしわが生まの  
かぎりとほく別れぬ

うす濁る地平ちへいのはての青あをに見ゆかすかに夏  
のとどろける雲



めぐりあひやがてただちに別れけり雨ふる  
四月すゑの九日

ゆく春の嵐のみだれ雨のみだれしづかにひ  
とと別るる日なり

かなしみの歩みゆく音のかすかなり疲れし  
胸をとほくめぐりて

しめやかに嵐みだるるはつ夏の夜のあはれ  
を寝ざめながむる

夏を迎ふおもひみだれてかき濁りつかれし  
むねは歌もうたはず

旅人あり街の辻なる練瓦屋の根に行き倒れ  
死にはてにける

いつしかに春は暮れけり  
こころまたさびし  
きままにはつ夏に入る

空そらのあなた深ふかきみどりの  
そこひよりさびし  
き時にかよふひびきあり

あをあをと若葉わかば萌えいづる  
森なかに一もと  
松まつの花はな咲きにけり

そこ知らず思ひ沈みて眞晝時一樹の青のた  
かきにむかふ

大木の幹の片へのましろきにこぼれぬる日  
の夏のかなしみ

窓ちかき水田のなかの榛の木の日にげに青  
み嵐するなり

大木たいぎの青葉あおばのなかに小鳥ことり啼なく細こまかに晝ひるの日  
をみだしつつ

とりみだし哀かなしみさけび讚嘆さんたんすああ天地あめつちに  
夏の來きれる

生なまくといふ否いなむべからぬちからより逃のがれて  
戀こひにすがらむとしき

ひややかにことは終りき別れてき斯くある  
われをつくづくと見る

思ひいでてなみだはじめて頬ほをつたふ極きはまり  
知らぬわかれなりしかな

女をんなひとり棄すてしばかりの驚おどろきに眼め覺ざめてわ  
れのさびしさを知る

甲斐もなくしのびしのびにいや深にひとに  
戀ひつつ衰へにけり

忽然と息断えしごとく夜ふかく寝ざめてひ  
とをおもひいでしかな

怨むまじやなにかうらみむ胸のうちのかな  
しきところ斯くちかひける

ありし夜のひとの枕まくらに敷きたりしこのかひ  
なかも斯く瘦やせにける

わが戀の終まはりゆくころとりどりに初はつなつの  
花の咲きいでにけり

音おともなく人等ひとら死にゆく音もなく大あめつち  
に夏なつは來にけり



海山うみやまのよこたはるごとくおごそかにわが生い  
くとふを信しんぜしめたまへ

きはみなき生命いのちのなかのしばらくのこのさ  
びしさを感かん謝しゃしまつる

あなさびし白晝まひるを酒に酔ひ痴おぼれて皐月さつき大野おほの  
の麥畑むぎはたをゆく

青草あろくさによこたはりゐてあめつちにひとりな  
るものの自由じゆうをおもふ

畑はたなかにふと見いでつる瘦馬やせうまの草食くさばみゐた  
り水みづ無月なつき眞晝まひる

ひややかにつひに眞白ましろき夏花なつはなのわれ等がな  
かにあり終りけり

棕櫚しゅろの樹きの黄色きいろの花はなのかげに立ち初夏はつなつの野  
をとほくながむる

初夏の野のずゑの川のの濁にごれるにものの屍むくろの浮  
きしづみ行く

けだものはその死處しにどころとこしへにひとに見せ  
ずと聞きつたへけり

水無月の洪水おほみづなせる日光にっくわうのなかにうたへり  
麥刈むぎかり少女をとめ

遠くゆきまたかへりきて初夏はつなつの樹きにきこゆ  
なり眞晝まひる日の風

木蔭こかげよりなぎさに出てぬ渚より木かげに入  
りぬ海鳴うみなるゆふべ

松まつ咲きぬ楓かへてもささぬはつ夏のさびしきはな  
の咲きそめにけり

郊外かうぐわいに友のめうとのかくれ住すむ家をさがし  
て麥畑むぎはたをゆく

夜よのほどに凋しほみはてぬる夏草なつぐさの花あり朝の  
瓶からの白さよ

少女<sup>をとめ</sup>子の夏<sup>なつ</sup>のころもの襪<sup>ひた</sup>にゐて風<sup>かぜ</sup>わたるご  
とにうごくかなしみ

母<sup>はは</sup>となりてやがてつとめの終<sup>はつ</sup>りたるをみな  
の顔<sup>かほ</sup>に眼<sup>まなこ</sup>をとめて見る

夏<sup>なつ</sup>深<sup>ふか</sup>しかの山<sup>さん</sup>林<sup>りん</sup>のけだもののごとく生きむ  
と雲<sup>くも</sup>を見ておもふ

麥の穂の赤らむころとなりけりひと棄て  
しのちのはつ夏に入る

いつ知らず夏も寂しう更けそめぬほのかに  
合歡の花咲きにけり

わがこころ動くともなく青草に寢居つつ空  
の風にしたがふ

夏草の延び青みゆく大地を静かに踏みて我  
等あゆめり

深草の青さがなかに立つ馬の肥えたる脚に  
汗の湧く見ゆ

夏白晝うすくれなるの薔薇よりかすかに蜂  
の羽音さこゆる



わが友の妻とならびて椽ゑんに立ち眞晝まひるかへて  
の花をながむる

麥畑の夏の白晝まひるのさびしさや讚美歌さんびか低ひくく  
ちびるに出づ

黄きなる麥むぎ一穂ひとほぬきとり手にもちて雲なきも  
との高原たかはらをゆく

高原たかはらや青の一樹いちじゆとはてしなき眞白ましろき道とわ  
がまへに見ゆ

麥畑のうにんのなかにうごける農人を見ゐつつなみ  
だしづかにくだる

わが顔かほもあかがねいろに色づきぬ高原たかはらの麥  
は垂穂たりのほしにけり

ひややかに涙はひとりながれたりころろ  
れしく死しなむとおもふに

われみづから死しにをしたしくおもふころ誰たれ彼かれ  
ひとのよく死ぬるかな

火ひの山やまにけむりは断たえて雪ゆきつみぬしづかに  
われのいつか死ぬらむ

渚より海見るごとく汪洋とながるる死のま  
へにたたずむ

夏白晝あるかなきかのさびしさのころの  
うへに消えがてにする

松葉散る皐月の暮の或るゆふべをんな棄て  
むと思ひたちにき

影のごとくこよひも家を出てにけり戸山が  
原の夕雲を見に

皐月ゆふべ梢はなれし木の花の地に落つる  
間のあまきかなしみ

ひとつひとつ足の歩みの重き日の皐月の原  
に頬白鳥の啼く

日かげ満てる木の間に青き草をしき梢をわ  
たる晝の風見る

見てあればかすかに雲のうごくなり青草の  
なかにわれよこたはる

わがいのち空に満ちゆき傾きぬあなはるか  
なりほととぎす啼く

たそがれの沼尻ぬじりの水に雲うつる麥刈る鎌かまの  
音ねもきこえ來る

なつかしさ皐月の岡のゆふぐれの青の大樹おほき  
の蔭かげに如しかめや

落日らくじつのひかり梢こすえを去りにけり野ずゑをとほ  
く雲のあゆめる

けむりありほのかに白<sup>しろ</sup>し水<sup>み</sup>無<sup>な</sup>月<sup>つき</sup>のゆふべう  
らがなし野<sup>や</sup>羊<sup>ぎ</sup>の鳴<sup>な</sup>くあり

わが行けばわがさびしさ<sup>す</sup>を吸<sup>す</sup>ふに似る夏の  
ゆふべの地<sup>つち</sup>のなつかし

麥<sup>むぎ</sup>すでに刈<sup>か</sup>られしあとの畑<sup>はた</sup>なかの徑<sup>こみち</sup>を行<sup>い</sup>き  
ぬ水<sup>みづ</sup>無<sup>な</sup>月<sup>つき</sup>ゆふべ



椅子いすに耐たへず室むろをさまよひ家をいで野のに行  
きまたも椅子いすにかへりぬ

野を行けば麥は黄ばみぬ街ゆけばうすき衣ころも  
ををんな着きにけり

やうやうに戀ひうみそめしそのころにとり  
わけ接吻きずをよくかはしける

強いられて接吻するときよ戸の面には夏の  
白日を一樹そよがず

いちいちに女の顔の異なるを先づ第一の不思議  
とぞおもふ

六月の濁れる海をふとおもひ午後あわただ  
し品川へ行く

とかくして動きいでたる船蟲の背になまぐ  
さき六月の日よ

月いまだひかりを知らず水無月のゆふべは  
ながし汐の満ち來る

海のうへの月のほとりのうす雲にほのかに  
見ゆる夏のあはれさ

少女等をとららのかろき身みぶりを見てあればものぞ  
かなしき夏なつのゆふべは

いささかを雨に濡ぬれたる公園こうえんの夏なつの大路おほぢを  
赤あかき傘かさゆく

いたづらに麥は黄ばみぬ水無月のわがさび  
しさにつゆあづからず

八月の街を行き交ふ群集の黙せる顔のなつかしきかな

とこしへに逢ふこと知らぬむさむさのころころの寂しき歩み

あめつちに獨り生きたりあめつちに断えみ  
たえずみひとり歌へり

六七月の頃を武藏國多摩川の畔なる百草山に

送りぬ、歌四十六首。

涙なみだぐみみやこはづれの停車場ていしゃばの汽車きしゃの一室ひとま  
にわれ入りにけり

ともすればわが蒼あをさめし顔のかけ汽車のガ  
ラスの戸にうつるあり

雨あめ白しろく木の間まにけふる高原たかはらを走はしれる汽車の  
窓まどによりそふ

水み無な月つきの山やま越こえ來くればをちこちの木この間まに  
白しろく栗くりの咲さく見みゆ

とびとびに落おち葉はせしごとわが胸むねにさびしさ  
散ちりぬ頬ほほ白しろ鳥とりの啼なく

啼きそめしひとつにつれてをちこちの山の  
月夜に梟の啼く

たそがれのわが眼のまへになつかしく木の  
葉そよげり梟の啼く

夕山の木の間に入つて入りも来ぬさだかに  
物をおもふとなしに



あをばといふ山の鳥啼くはじめ無く終りを  
知らぬさびしき音なり

わがこころ沈み來ぬれば火の山のけむりの  
影をつねにやどしぬ

檜の林松のはやしの奥ふかくちひさき路に  
したがひて行く

青海あをうみのうねりのごとく起おき伏ふせる岡の國あ  
りほととぎす行く

わが死にしのちの静しづけき斯かる日にかく頬ほ白じ  
鳥ろの啼なきつづくらむ

紫陽花あじさのその水みづいろのかなしみの滴したたるゆふ  
へかな蛸かなのなく

煙青けむろきたばこを持ちて家を出て林に入りぬ  
雨後うごの雫しづくす

拾ひろひつるうす赤あからみし梅うめの實みに木の間ゆき  
つつ齒をあてにけり

かたはらの木きに頬白鳥の啼なけるありこころ  
恍くわうたり眞ま晝ひる野のを見る

日を浴びて野ずゑにとほく低く見ゆ涙をさ  
そふ水無月の山

松林山をうづめて静まりぬとほくも風の消  
えゆけるととき

眞晝野や風のなかなるほのかなる遠き杜鵑  
の聲さこえ來る

梅雨晴の午後こごのくもりの天地あめつちのつかれしな  
かにほととぎす啼く

山に來てほのかにおもふたそがれの街まちにの  
こせしわが靴くつの音おと

或あるゆふべ思ひがけなくたづね來こしさびし  
き友をつくづくと見る

幹みき白しろく木この葉は青あをかる林りん間かんの明あかるきなかに歩  
み入りにき

わが行けば木き木ぎの動うごくがごとく見ゆしづか  
なる日の青あをさ林はやしよ

かなしめる獸けもののごとくさまよひぬ林は深し  
日は狭さ青あをなり

はてしなくあまたの岡の起き伏せり眼に日  
光の白く満つかな

別るべくなりてわかれし後の日のこのさび  
しさをいかに追ふべき

棄て去りしのちのたよりをさまざまに思ひ  
つくりて夜夜をなぐさむ

ゆめみしはいづれも知らぬ人なりき寝<sup>ね</sup>ざめ  
さびしく君に涙<sup>なみだ</sup>す

遠くよりさやさや雨のあゆみ來て過ぎゆく  
夜半<sup>よは</sup>を寝<sup>ね</sup>ざめてありけり

ゆくりなくとあるゆふべに見いてけり合<sup>あ</sup>歡<sup>わ</sup>  
のこずゑの一ふさの花<sup>はな</sup>



きはみなき旅たびの途みちなるひとりぞとふとなつ  
かしく思ひいたるぬ

六月の山のゆふべに雨晴あめはれぬ木この間まにかな  
し日のながれたる

ゆふぐれの風ながれたる木の間ゆきささやか  
にものを思ひいでしかな

ゆふ雨さめのなかにほのかに風の見ゆ白夏しろなつばな花の  
そぼ濡ぬれて咲く

放はなたれし悲哀ひあひのごとく野に走り林にはしる  
七月がつのかぜ

松林まつはやし風の断たゆればわがこころふるへておも  
ふ黒髪くろかみの香かを

かなしきは夜よるのころもに更かふる時おもひい  
づるがつねとなりぬる

鋭すどくもわかき女をんなを責せめたりきかなしかりに  
しわがいのちかな

七月の山やまの間あひたに日光にっくわうは青うよどめり飛ぶつ  
ばめあり

午後晴れぬ煙草のあまさをしとしとに胸に浸  
む日ほととぎす啼く

暈帯びて日は空にあり山山に風青暗しほと  
とぎす啼く

生くことのものうくなりしみなもとに時に  
おもひのたどりゆくあり

うち断えて杜鵑を聞かずうす青く松の梢に  
實の満ちにけり

わがこころ静かなる時つねに見ゆ死といふ  
ものなのつかしきかな (以上)

秋風吹くつかれて獨りたそがれの露臺にの  
ぼり空見てあれば

いつ知らず重ねて胸むねに置きたりし双むろのわが  
手を見れば涙落なみだつ

このごろの迷まよひ亂みだれにありわびて寂さびしや  
われに歸かへらむとする

しづやかに大天地おほあめつちに傾かたむきて命いのちかなしき秋は  
來にけり

まれまれに云いひし怨言かごとのはしばしのあはれ  
なりしを思ひ出づる日

物をおもふ電車待つとて十月の街まちの柳やなぎのか  
げに立ちつつ

公園こうえんの木草きぐさかすかに黄きに染そみぬ馴れしベン  
チけふに今日けふもいこへる

松蟲鳴きそよ風わたるたそがれの小野の木  
の間を過ぎなやむかな

日は黄なり斑斑として十月の風みだれたる  
木の間の人に

栗の樹のこずゑに栗のなるごとき寂しき戀  
を我等遂げぬる



たはむれのやうに握りし友の手  
の離しがたかり友の眼を見る

髪ながく垂れて額の蒼を掩ふ  
無言よ君にくちづけてゐむ

野には來ぬこころすこしもなぐさ  
まらず木の間を行きつ草に座りつ

ふるさとのお秀ひせが墓かぶに草くさ枯かれむ海うみにむかへ  
る彼かの岡おかの上へに

波なみ白しろく断つえず起たれる新秋しんしゅうのとほき渚しづに行いか  
むとぞおもふ

けふ別わかれまた逢あふこともあるまじきをんな  
の髪かみをしみじみと見る

こころ永く待つといふなりこころ永く待つ  
といふなりかなしき女をんな

冷やかに部屋にながるる秋の夜の風のなか  
なり我等は黙す

こころ斯く荒みはてぬるわが顔のその唇を  
おもふに耐へず

秋あきの白晝ひる風呂ふろにひたりて疲つかれたる身はおも  
ふなり女をんなのことを

破やぶれたるたたみのうへに一きやく脚ねの寝椅子ねみすを置  
きつ秋あきの夜よを寝ねる

うまさ肉にくたふべて腹はらの満みちぬれば壁かべにもた  
れてゐねぶりをする

酔ふもまたなにかはせむすべからく酒を  
棄てむとおもひ立ちにき

二階より更けて階子をくだる時深くも秋の  
夜を感じぬる

おもはるるなさけに馴れて驕りたるひとの  
ところを遠くながむる

手<sup>て</sup>をとりにて心いささかしづまりぬもの言<sup>い</sup>へ  
ば彌<sup>い</sup>寂<sup>さ</sup>しさの増す

秋のあさうなじに薄<sup>うす</sup>く白<sup>しろ</sup>粉<sup>こ</sup>の残<sup>のこ</sup>れるを見つ  
つ別<sup>わか</sup>れかへりぬ

わがちさき帽<sup>ぼう</sup>のうへより溢<sup>あふ</sup>れ來<sup>く</sup>る秋<sup>あき</sup>のひか  
りに血<sup>ち</sup>は安<sup>やす</sup>からず

健たけやかに身はこころよく饑うゑてあり野菊のぎくの  
なかに日を浴あびて臥す

四階よりのぞめば街まちの古濠ふるぼりにゆふべ濁りて  
潮しほのさし來る

靴屋くつやあり靴をつくるふ鍛治屋かぢやありくろがね  
を打つ秋の日の街

くちもとのいふやうもなく愛らしきこの少まう  
年ねんにくちづけをする

わかくさの山の麓ふもとは落葉おちばせむいまか静かに  
鹿しかの歩あひまむ

秋風吹き日かげさやかに流れたる窓まどにふた  
りは旅たびをおもへり



或時あるときはなみだぐみつつありし日の寂しき戀こひ  
にかへらむとする

はてしなくひろき林はやしに行かしめよしばし落おち  
葉はの音ねを斷たしめよ

彼かのとほき林はやしに棲すめる獸けたものはかなしめる日ひの  
無なきかあらじか

われ死なば林の地つちを堀りかへしひとに知ら  
ゆな其處そこに埋うづめよ

林には一鳥てう啼なかず木のかげにたふれて秋に  
身を浸ひたし居り

涙落なみたおつまぬかれがたき運命うんめいのもとにしづか  
に眼を瞑こぢむとし

棄て去りしわが女をばさまさまに人等啄む  
さまの眼に見ゆ

かへり來よ櫻の紅葉散るころぞわがたまし  
ひよ夙く歸り來よ

しかれども一度び戀に沈み來しこのかなし  
さをいかに葬らむ

さまざまの女をんなの群むねに入りそめぬ戀こひに追はれ  
し漂泊へうはくびと人は

ことごとく落葉おちばしはてし大木たいぼくにこよひ初め  
て風のきこゆる

晴れわたる空そらより樹きより散りきたるああ落ち  
葉えふのさまのたのしさ

かきいだけば胸に沈みてよよと泣くそのか  
みの日の少女のごとく

妻つれてうまれし國の上野に友はかへりぬ  
秋風吹く日

木木のかげまだらに落ちてわが肩に秋の日  
重し林に死なむ

彼の國かの清教徒くによりなほさよく林に入りて  
棲ひまむともおもふ

ありつる日死をおもふことしげかりし身は  
茫然ぼうぜんと落葉らくえつを見る

山蔭やまかげに吸はれしごとく四五の村むら集すくへる秋  
の國くにに來きにけり (以下伴二と旅に出てて)

名も知らぬ河かはのほとりにめぐり來ぬけむり  
流ながるる秋の夕ゆふべに

白白しらしろとゆふべの河の光るありたひらの國の  
秋の木の間に

雲うすく空に流れて風なぎたる日林の奥に落  
葉た断えせず

落葉樹らくえふじゆまばらに立てる林間りんかんの地平ちへいにひくし  
遠山とほやまの見ゆ

身を起しまた忍しのびかに歩ほをやりぬ落葉らくえふばや  
しの奥の木の間を

手ふるればはらはらはらと落葉らくえふす林のおく  
の黄なる一もと



林間の落葉を踏みつ樹に倚りつ涙かきたれ  
なにを歌ふぞ

ながながと地上に身をば横へぬ夕陽の前の  
落葉林に

かきあつめ白晝落葉に火をやりぬ林の奥へ  
白き烟す

ひややかに落葉林をつらぬきて鐵路走れり  
限りを知らず

うす甘き煙草の毒に酔ひはてぬ黄なる林の  
奥の一人は (以上)

軒下の濠のひびきと硝子戸のゆふ風の音と  
椅子に痛める

夕暮のそよ風のなかにいたみ出づ倦みし額  
に浮ける蒼さは

新しき鴛べんに代へしゆふぐれの机のうへ  
に満てるかなしみ

ゆふぐれは蒼みて來りまた去りぬ窓邊の椅  
子にわれの埋るる

ゆふ日さし窓のガラスは赤赤と風に鳴るな  
り長椅子に寝る

數知れぬ女の肌に溺れたるこのわかき友は  
酒を好まず

打ち連れて活動寫眞觀に行きし女のあとに  
灯をともしなすなり

果實をあまたたふべし夕まぐれ飯の白さを  
見るは眼痛し

家家にかこまれはてしわが部屋の暗さにこ  
もりストーヴを焚く

悲しげに赤き火を見せゆ闇の椅子に人あ  
り煙草は匂ふ

黒髪くろかみの匂かみふより哀かなしつかれたる身にゆふぐ  
れのいどみ寄るさま

海うみに沿そひ山やまのかげなるみだらなる温泉町おんせんまちに  
冬ふゆは來りぬ

涙なみだたたえ若わかかる友ともはかなしみぬ見みよわが戀こひ  
は斯ごとくもまつたし

容れがたし一度びわれを離れたる汝がここ  
ろはまた容れがたし

白白と鷗まひ出づる山かげの冷き海をおも  
ひ出でけり

離れたる愛のかへるを待つごときこの寂し  
さの咒ふべきかな

この河の流れて海に入らむさま  
蘆あしの間あひだにおもひ悲かなしむ

灯ともしびをともしむとする横よこ顔がほの友の疲つかれは闇に  
浮き出づ

命いのちなりそのくちびるを愛せよと消息せうそくに書き  
涙なみだ落おとしぬ



衰へしひとの額をかきいだき接吻せむとす  
ればあはれ眼を瞑づ

半島の國の端なる山かげのちさき港に帆を  
下しけり (以下旅に出てて)

枝垂れ咲けり暗綠色の浪まろぶ海の岸なる  
老樹の椿

青<sup>あを</sup>き白<sup>しろ</sup>き濤<sup>なみ</sup>のみだれにうちまぢり磯<sup>いそ</sup>に一<sup>は</sup>羽<sup>は</sup>  
の小<sup>こ</sup>鳥<sup>とり</sup>啼<sup>な</sup>くあり

ひろびろと光れる磯に獨りゐて貝ひろふ手  
に眺め入りぬる

越<sup>こ</sup>え歩<sup>あ</sup>りく海にうかべる半島の冬のうす黄  
の岡より岡へ

旅人は海の岸なる山かげのちひさき町をい  
ま過ぎるなり

海岸のちひさき町の生活の旅人の眼にうつ  
るかなしさ

男あり渚に船をつくろへり背にせまりて海  
のかがやく

ゆふ日赤き漁師町行きみだれたる言葉のな  
かに入るをよろこぶ

風風ぎぬ夕陽赤き灣内の片すみにて帆を  
おろす船

わが船は岬に沿へり海青しこの伊豆の國に  
雪のつもれる

夕陽せきようの赤あかくしたたる光線くわうせんにうかび出いでてたり  
岬みさきの街まちは

春白晝はるまひるここの港みなとに寄よりもせず岬みさきを過すぎて行いく船ふねのあり(以上)

— (完) —